校異源氏物語・わかな下

ことはりとはおもへともうれたくもいへるかないてやなそかくことなる事なき
あへしらひ許をなくさめにてはいかゝすくさむかゝる人つてならてひと事をも
のたまひきこゆる世ありなむやと思ふにつけてもおほかたにてはおしくめてた
しとおもひきこゆる院の御ためなまゆかむ心やそひにたらんつこもりの日は人
〻あまたまいり給へりなま物うくすゝろはしけれとそのあたりの花の色をもみ
てやなくさむとおもひてまいりたまふ殿上のゝりゆみきさらきとありしをすき
て三月はた御き月なれはくちおしくと人〻思ふにこの院にかゝるまとゐあるへ
しときゝつたへてれいのつとひたまふ左右大将さる御なからひにてまいりたま
へはすけたちなといとみかはしてこゆみとのたまひしかとかちゆみのすくれた
る上手ともありけれはめしいてゝいさせたまふ殿上人ともゝつき　くしきかき
りはみなまへしりへの心こまとりに方わきてくれゆくまゝにけふにとちむるか
すみのけしきもあはたゝしくみたるゝゆふかせに花のかけいとゝたつことやす
からて人〻いたくゑひすきたまひてえむなるかけものともこなたかなた人〻の
御心みえぬへきをやなきのはをもゝたひいあてつへきとねりとものうけはりて
いとるむしんなりやすこしこゝしきてつきともをこそいとませめとて大将たち
よりはしめておりたまふに衛門督人よりけになかめをしつゝものしたまへはか
のかたはし心しれる御めにはみつけつゝなをいとけしきことなりわつらはしき
事いてくへき世にやあらむと我さへ思ひつきぬる心ちすこの君たち御中いとよ
しさるなからひといふなかにも心かはしてねんころなれはゝかなき事にても物
おもはしくうちまきるゝことあらむをいとおしくおほえたまふ身つからもおと
ゝをみたてまつるにけおそろしくまはゆくかゝる心はあるへきものかなのめな
らむにてたにけしからす人にてむつかるへきふるまひはせしと思ものをまして
おほけなき事とおもひわひてはかのありしねこをたにえてしかな思事かたらふ
へくはあらねとかたはらさひしきなくさめにもなつけむとおもふにものくるお
しくいかてかはぬすみいてむとそれさへそかたき事なりける女御ゝ方にまいり
てものかたりなときこえまきらはし心みるいとおくふかく心はつかしき御もて
なしにてまほにみえたまふ事もなしかゝる御中らひにたにけとをくならひたる

をゆくりかにあやしくはありしわさそかしとはさすかにうちおほゆれとおほろけにしめたるわか心からあさくも思ひなされす春宮にまいり給てろなうかよひ給へる所あらむかしとめとゝめてみたてまつるにゝほひやかになとはあらぬ御かたちなれとさはかりの御ありさまはたいとことにてあてになまめかしくおはしますうちの御ねこのあまたひきつれたりけるはらからともの所〻にあかれてこの宮にもまいれるかいとおかしけにてありくをみるにまつおもひいてらるれは六条の院のひめ宮の御方に侍ねこゝそいとみえぬやうなるかほしておかしう侍しかはつかになむみ給へしとけいしたまへはわさとらうたくせさせたまふ御心にてくはしくとはせ給からねこのこゝのにたかへるさましてなん侍りしおなしやうなる物なれと心おかしく人なれたるはあやしくなつかしき物になむ侍なとゆかしくおほさる許きこえなしたまふきこしめしをきてあのことくきりつほの御かたよりつたへてきこえさせ給けれはまいらせたまへりけにいとうつくしけなるねこなりけりと人〻けうするを衛門督はたつねんとおほしたりきと御けしきをみをきて日ころへてまいりたまへりわらはなりしより朱雀院のとりわきておほしつかはせ給しかは御山すみにをくれきこえては又この宮にもしたしうまいり心よせきこえたり御ことなとをしへきこえ給とて御ねこともあまたつとひ侍にけりいつらこのみし人はとたつねてみつけ給へりいとらうたくおほえてかきなてゝゐたり宮もけにおかしきさましたりけり心なんまたなつきかたきはみなれぬ人をしるにやあらむこゝなるねこともことにをとらすかしとのたまへはこれはさるわきまへ心もおさ　く侍らぬものなれとその中にも心かしこきはをのつからたましひ侍らむかしなときこえてまさるともさふらふめるをこれはしはしたまはりあつからむと申給心の中にあなかちにおこかましくかつはおほゆるつゐにこれをたつねとりてよるもあたりちかくふせ給あけたてはねこのかしつきをしてなてやしなひたまふ人けとをかりし心もいとよくなれてともすれはきぬのすそにまつはれよりふしむつるゝをまめやかにうつくしと思ふいといたくなかめてはしちかくよりふし給へるにきてねう　くといとらうたけになけはかきなてゝうたてもすゝむかなとほゝゑまる

　恋わふる人のかたみとてならせはなれよなにとてなくねなるらむこれもむかしのちきりにやとかほをみつゝのたまへはいよ　くらうたけになくをふところにいれてなかめゐ給へりこたちなとはあやしくにはかなるねこの時めくかなかやうなる物みいれたまはぬ御心にとゝかめけり宮よりめすにもまいらせすとりこめてこれをかたらひ給左大将殿の北のかたは大殿のきみたちよりも右大将

の君をはなをむかしのまゝにうとからす思ひきこえ給へり心はへのかと　くしくけちかくおはする君にてたいめんし給時　くもこまやかにへたてたるけしきなくもてなし給つれは大将もしけいさなとのうと　くしくをよひかたけなる御心さまのあまりなるにさまことなる御むつひにておもひかはし給へりおとこ君いまはましてかのはしめの北の方をもゝてはなれはてゝならひなくもてかしつきゝこえ給この御はらにはおとこきむたちのかきりなれはさう　くしとてかのまきはしらのひめきみをえてかしつかまほしくし給へとおほち宮なとさらにゆるしたまはすこの君をたに人わらへならぬさまにてみむとおほしの給みこの御おほえいとやむことなく内にもこの宮の御心よせいとこよなくてこの事とそうし給ことをはえそむき給はす心くるしき物におもひきこえ給へりおほかたもいまめかしくおかしくおはする宮にてこの院大殿にさしつきたてまつりては人もまいりつかうまつり世人もをもくおもひきこえけり大将もさる世のをもしとなり給へきしたかたなれはひめ君の御おほえなとてかはかるくはあらんきこえいつる人ゝ事にふれておほかれとおほしもさためす衛門督をさもけしきはまはとおほすへかめれとねこにはおもひおとしたてまつるにやかけても思ひよらぬそくちおしかりけるはゝ君のあやしくなをひかめる人にてよのつねのありさまにもあらすもてけちたまへるをくちおしきものにおほしてまゝはゝの御あたりをは心つけてゆかしく思ひていまめきたる御心さまにそものしたまひける兵部卿宮なをひと所のみおはして御心につきておほしけることゝもはみなたかひて世中もすさましく人わらへにおほさるゝにさてのみやはあまえてすくすへきとおほしてこのわたりにけしきはみより給へれは大宮なにかはかしつかんとおもはむ女こをは宮つかへにつきてはみこたちにこそはみせたてまつらめたゝ人のすくよかになをなをしきをのみいまの世の人のかしこくするしなゝきわさなりとのたまひていたくもなやましたてまつり給はすうけひき申給つみこあまりうらみところなきをさう　くしとおほせとおほかたのあなつりにくきあたりなれはえしもいひすへし給はておはしましそめぬいとになくかしつきゝこえ給大宮は女こあまたものしたまひてさま　くものなけかしきおり　くおほかるにものこりしぬへけれとなをこのきみの事の思ひはなちかたくおほえてなん母きみはあやしきひか物にとしころにそへてなりまさりたまふ大将はたわか事にしたかはすとておろかにみすてられためれはいとなむ心くるしきとて御しつらひをもたちる御てつから御らんしいれよろつにかたしけなく御心にはいれたまへり宮はうせ給にける北のかたを世とゝもにこひきこえたまひてたゝむかしの御ありさ

まににたてまつりたらむ人をみむとおほしけるにあしくはあらねとさまかはりてそ物したまひけるとおほすにくちおしくやありけむかよひたまふさまいと物うけなり大宮いと心月なきわさかなとおほしなけきたりはゝ君もさこそひかみたまへれとうつし心いてくる時はくちおしくうき世と思はて給大将の君もされはよいたく色めきたまへるみこをとはしめよりわか御心にゆるし給はさりし事なれはにやものしと思ひ給へりかむの君もかくたのもしけなき御さまをちかくきゝ給にはさやうなる世中をみましかはこなたかなたいかにおほしみ給はましなとなまおかしくもあはれにもおほしいてけりそのかみもけちかくみきこえむとは思よらさりきかしたゝなさけ　くしう心ふかきさまにのたまひわたりしをあえなくあはつけきやうにやきゝおとし給けむといとはつかしくとしころもおほしわたる事なれはかゝるあたりにてきゝ給はむことも心つかひせらるへくなとおほすこれよりもさるへき事はあつかひきこえたまふせうとの君たちなとしてかゝる御けしきもしらすかほにゝくからすきこえまつはしなとするに心くるしくてもてはなれたる御心はなきにおほ北のかたといふさかなものそつねにゆるしなくゑんしきこえ給みこたちはのとかにふた心なくてみ給はむをたにこそはなやかならぬなくさめには思ふへけれとむつかり給を宮ももりきゝたまひてはいときゝならはぬ事かなむかしいとあはれとおもひし人をゝきても猶はかなき心のすさひはたえさりしかとかうきひしきものゑんしはことになかりし物を心月なくいとゝむかしをこひきこえ給つゝふるさとにうちなかめかちにのみおはしますさいひつゝもふたとせ許になりぬれはかゝる方にめなれてたゝさるかたの御中にてすくしたまふはかなくて年月もかさなりて内のみかと御くらゐにつかせたまひて十八年にならせ給ひぬつきの君とならせたまふへきみこおはしまさすものゝはへなきに世中はかなくおほゆるを心やすく思ふ人ゝにもたいめんしわたくしさまに心をやりてのとかにすきまほしくなむとゝしころおほしのたまはせつるをひころいとをもくなやませたまふ事ありてにはかにおりゐさせたまひぬ世の人あかすさかりの御世をかくのかれたまふことゝおしみなけゝと春宮もをとなひさせ給ひにたれはうちつきて世中のまつりことなとことにかはるけちめもなかりけりおほきおとゝちしのへうたてまつりてこもりゐたまひぬよの中のつねなきによりかくかしこきみかとのきみもくらゐをさりたまひぬるにとしふかき身のかうふりをかけむなにかおしからむとおほしのたまひて左大将右大臣になり給てそ世中のまつりことつかうまつり給ける女御の君はかゝる御世をもまちつけ給はてうせ給にけれはかきりある御くらゐをえたまへれとも

のゝうしろの心ちしてかひなかりけり六条の女御の御はらのいちの宮はうにゐたまひぬさるへき事とかねておもひしかとさしあたりてはなをめてたくめおとろかるゝわさなりけり右大将の君大納言になりたまひぬいよ　くあらまほしき御なからひなり六条院はおりゐたまひぬる冷泉院の御つきおはしまさぬをあかす御心の内におほすおなしすちなれと思ひなやましき御事なくてすくしたまへるはかりにつみはかくれてするゐの世まてはえつたふましかりける御すくせくちおしくさう　くしくおほせと人にのたまひあはせぬ事なれはいふせくなむ春宮の女御はみこたちあまたかすそひ給ていとゝ御おほえならひなし源氏のうちつゝきゝさきにゐたまふへきことを世人あかすおもへるにつけても冷泉院の后はゆへなくてあなかちにかくしをきたまへる御心をおほすにいよ　く六条院の御ことを年月にそへてかきりなく思ひきこえたまへり院の御かとおほしめしゝやうにみゆきも所せからてわたり給ひなとしつゝかくてしもけにめてたくあらまほしき御ありさまなりひめ宮の御事はみかと御心とゝめておもひきこえ給ふおほかたの世にもあまねくもてかしつかれたまふをたいのうへの御いきをひにはえまさりたまはすとし月ふるまゝに御中いとうるはしくむつひきこえかはし給ひていさゝかあかぬことなくへたてもみえたまはぬものからいまはかうおほそうのすまゐならてのとやかにをこなひをもとなむおもふこの世はかはかりとみはてつる心ちするよはひにもなりにけりさりぬへきさまにおほしゆるしてよとまめやかにきこえたまふおり　くあるをあるましくつらき御事なりみつからふかきほいあることなれととまりてさう　くしくおほえ給ひある世にかはらむ御ありさまのうしろめたさによりこそなからふれつゐにそのことゝけなむのちにともかくもおほしなれなとのみさまたけきこえたまふ女御のきみたゝこなたをまことの御おやにもてなしきこえたまひて御方はかくれかの御うしろみにてひけしものしたまへるしもそなか　くゆくさきたのもしけにめてたかりけるあまきみもやゝもすれはたえぬよろこひの涙ともすれはおちつゝめをさへのこひたゝらしていのちなかきうれしけなるためしになりてものし給すみよしの御願かつ　くはたし給はむとて春宮の女御の御いのりにまてたまはんとてかのはこあけて御覧すれはさま　くのいかめしきことゝもおほかりとしことの春秋のかくらにかならすなかき世のいのりをくはへたるくわんともけにかゝる御いきをひならてははたし給へきことゝも思ひをきてさりけりたゝはしりかきたるおもむきのさえ　くしくはか　くしくほとけ神もきゝいれ給へきことのはあきらかなりいかてさる山ふしのひしり心にかゝることゝもを思ひよりけむとあはれにお

ほけなくも御らむすさるへきにてしはしかりそめに身をやつしけるむかしの世のをこなひ人にやありけむなとおほしめくらすにいとゝかる　くしくもおほされさりけりこのたひはこの心をはあらはしたまはすたゝ院の御ものまうてにていてたち給うらつたひのものさはかしかりし程そこらの御くはんともみなはたしつくし給へれともなを世中にかくおはしましてかゝる色　くのさかえをみたまふにつけても神のおほむたすけはわすれかたくてたいのうへもくしきこえさせたまひてまうてさせたまふひゝき世のつねならすいみしくことゝもそきすてて世のわつらひあるましくとはふかせたまへとかきりありけれはめつらかによそほしくなむかんたちめも大臣ふた所をゝきたてまつりてはみなつかうまつり給まひ人はゑふのすけとものかたちきよけにたけたちひとしきかきりをえらせ給このえらひにいらぬをははちにうれへなけきたるすきものともありけりへいしうもいはし水かものりむしのまつりなとにめす人〻のみちみちのことにすくれたるかきりをとゝのへさせ給へりくはゝりたるふたりなむ近衛つかさの名たかきかきりをめしたりける御かくらの方にはいとおほくつかうまつれり内春宮院の殿上人方　くにわかれて心よせつかうまつるかすもしらすいろ　くにつくしたるかんたちめの御むまくらむまそひ随身ことねりわらはつき　くのとねりなとまてとゝのへかさりたるみものまたなきさまなり女御殿たいのうへはひとつにたてまつりたりつきの御くるまにはあかしの御方あま君しのひてのりたまへり女御の御めのと心しりにてのりたりかた　くのひとたまゑうへの御方の五女御とのゝいつゝあかしの御あかれの三目もあやにかさりたるさうそくありさまいへはさらなりさるあま君をはおなしくはおいのなみのしはのふはかりに人めかしくてまうてさせむと院はのたまひけれとこのたひはかくおほかたのひゝきにたちましらむもかたはらいたしもし思ふやうならむ世中をまちいてたらはと御方はしつめ給けるをのこりのいのちうしろめたくてかつ　く物ゆかしかりてしたひまいり給なりけりさるへきにてもとよりかくにほひたまふ御身ともよりもいみしかりける契あらはに思ひしらるゝ人のみありさまなり十月中の十日なれは神のいかきにはふくすも色かはりて松の下もみちなとをとにのみも秋をきかぬかほなりこと　くしきこまもろこしのかくよりもあつまあそひのみゝなれたるはなつかしくおもしろくなみかせのこゑにひゝきあひてさるこたかき松風にふきたてたるはふえのねもほかにてきくしらへにはかはりて身にしみことにうちあはせたるひやうしもつゝみをはなれてとゝのへとりたる方おとろ　くしからぬもなまめかしくすこうおもしろく所からはましてきこえけり山あゐに

すれるたけのふしは松のみとりにみえまかひかさしの色ゝは秋のくさにことなるけちめわかれてなにことにもめのみまかひいろふもとめこはつるすゑにわかやかなるかむたちめはかたぬきておりたまふにほひもなくゝろきうへのきぬにすわうかさねのえひそめの袖をにはかにひきほころはしたるにくれなゐふかきあこめのたもとのうちしくれたるにけしきはかりぬれたる松はらをはわすれてもみちのちるに思ひわたさるみるかひおほかるすかたともにいとしろくかれたるおきをたかやかにかさしてたゝひとかへりまひていりぬるはいとおもしろくあかすそありけるおとゝむかしのことおほしいてられ中比しつみ給し世のありさまもめのまへのやうにおほさるゝにそのよのことうちみたれかたり給へき人もなけれはちしのおとゝをそこひしく思ひきこえ給けるいりたまひて二のくるまにしのひて

たれか又心をしりて住吉の神世をへたる松にことゝふ御たゝむかみにかきたまへりあま君うちしほたるかゝるよをみるにつけてもかのうらにていまはとわかれ給しほと女御の君のおはせしありさまなと思ひいつるもいとかたしけなかりける身のすくせの程を思ふよをそむき給し人も恋しくさま　くに物かなしきをかつはゆゝしとこといみして

すみのえをいけるかひあるなきさとは年ふるあまもけふやしるらんをそくはひむなからむとたゝうちおもひけるまゝなりけり

むかしこそまつわすられね住吉の神のしるしをみるにつけてもとひとりこちけり夜ひとよあそひあかしたまふはつかの月はるかにすみてうみのおもておもしろくみえわたるにしものいとこちたくをきて松原も色まかひてよろつの事そゝろさむくおもしろさもあはれさもたちそひたりたいのうへつねのかきねの内なから時　くにつけてこそけふあるあさゆふのあそひにみゝふりめなれ給けれみかとよりとのものみおさ　くし給はすましてかく宮このほかのありきはまたならひ給はねはめつらしくおかしくおほさる

すみの江の松に夜ふかくをく霜は神のかけたるゆふかつらかもたかむらの朝臣のひらの山さへといひけるゆきのあしたをおほしやれはまつりのこゝろうけたまふしるしにやといよ　くたのもしくなむ女御のきみ

神ひとのてにとりもたる榊葉にゆふかけそふるふかきよの霜中つかさのきみ

はふりこかゆふうちまかひをく霜はけにいちしるき神のしるしかつき　くかすしらすおほかりけるをなにせむにかはきゝをかむかゝるおりふしの歌はれ

いの上手めき給おとこたちも中　くいてきえして松のちとせよりはなれていまめかしきことなけれはうるさくてなむほの　くとあけゆくにしもはいよ　くふかくてもとするゑもたと　くしきまてゑひすきにたるかくらおもてともをのかかほをはしらておもしろきことに心はしみてには火もかけしめりたるにをを万さい　くとさかき葉をとりかへしつゝいはひきこゆる御世のするゑおもひやるそいとゝしきやよろつのことあかすおもしろきまゝに千よをひとよになさまほしき夜のなにゝもあらてあけぬれはかへるなみにきほふもくちおしくわかき人ゝおもふ松はらにはる　くとたてつゝけたる御くるまとものに風にうちなひくしたすたれのひま　くもときはのかけに花のにしきをひきくわへたるとみゆるにうへのきぬの色　くけちめをきておかしきかけはんとりつゝきてものまいりわたすをそしも人なとはめにつきてめてたしとはおもへるあま君のおまへにもせんかうのおしきにあをにひのおもてをりてさうし物をまいるとてめさましき女のすくせかなとをのかしゝはしりうこちけりまうて給しみちはこと　くしくてわつらはしき神たからさま　くに所せけなりしをかへさはよろつのせうようをつくし給いひつゝくるもうるさくむつかしきことゝもなれはかゝる御ありさまをもかの入道のきかすみぬ世にかけはなれたまへるのみなんあかさりけるかたきことなりかしましらはましもみくるしくや世中の人これをためしにて心たかくなりぬへきころなめりよろつのことにつけてめてあさみ世のことくさにてあかしのあま君とそさいはひ人にいひけるかのちしの大殿のあふみのきみはすくろくうつ時のことはにもあかしのあま君　くとそさいはこひける入道のみかとは御をこなひをいみしくし給て内の御事をもきゝいれ給はす春秋の行幸になむむかし思ひいてられ給事もましりけるひめ宮の御ことをのみそ猶えおほしはなたてこの院をは猶おほかたの御うしろみに思ひきこえ給て内　くの御心よせあるへくそうせさせ給二品になりたまひて御封なとまさるいよ　くはなやかに御いきをひそふたいのうへかく年月にそへて方　くにまさり給御おほえにわか身はたゝひと所の御もてなしに人にはをとらねとあまりとしつもりなはその御心はへもつゐにをとろへなむさらむ世をみはてぬさきに心とそむきにしかなとたゆみなくおほしわたれとさかしきやうにやおほさむとつゝまれてはか　くしくもえきこえ給はす内のみかとさへ御心よせことにきこえ給へはをろかにきかれたてまつらむもいとおしくてわたり給ことやう　くひとしきやうになりゆくさるへきこと　くはりとは思ひなからされはよとのみやすからすおほされけれと猶つれなくおなしさまにてすくし給春宮の御さしつきの女一の宮をこなたにとりわ

きてかしつきたてまつりたまふその御あつかひになむつれ　くなる御よかれのほともなくさめ給ひけるいつれもわかすうつくしくかなしと思ひきこえ給へり夏の御方はかくとり　くなる御むまこあつかひをうらやみて大将の君のないしのすけはらの君をせちにむかへてそかしつき給いとおかしけにて心はへもほとよりはされおよすけたれはおとゝの君もらうたかりたまふすくなき御つきとおほししかとするゑ　くにひろこりてこなたかなたいとおほくなりそひたまふをいまはたゝこれをうつくしみあつかひたまひてそつれ　くもなくさめ給ける右の大殿のまいりつかうまつり給ことにしへよりもまさりてしたしくいまは北の方もをとなひはてゝかのむかしのかけ　くしきすち思ひはなれ給にやさるへきおりもわたりまうてたまふたいのうへにも御たいめむありてあらまほしくきこえかはし給けりひめ宮のみそおなしさまにわかくおほときておはします女御の君はいまはおほやけさまにおもひはなちきこえ給ひてこの宮をはいと心くるしくをさなからむ御むすめのやうに思ひはくゝみたてまつり給朱雀院のいまはむけに世ちかくなりぬる心ちして物心ほそきをさらにこの世のことかへりみしと思ひすつれとたいめむなんいまひとたひあらまほしきをもしうらみのこりもこそすれことことしきさまならてわたり給へくきこえ給けれはおとゝもけにさるへき事也かゝる御けしきなからむにてたにすゝみまいり給へきをましてかうまちきこえ給ひけるか心くるしきことゝまいり給へきことおほしまうくついてなくすさましきさまにてやはゝひわたり給へきなにわさをしてか御覧せさせ給へきとおほしめくらすこのたひたり給はむとしわかなゝとてうしてやなとおほしてさま　くの御ほうふくのことい もゐの御まうけのしつらいなにくれとさまことにかはれることゝもなれは人の御心しらひともいりつゝおほしめくらすいにしへもあそひの方に御心とゝめさせ給へりしかはまひ人かく人なとを心ことにさためすくれたるかきりをとゝのへさせ給右のおほ殿の御子ともふたり大将の御こ内侍のすけはらのくはへて三人またちいさきなゝつよりかみのはみな殿上せさせたまふ兵部卿の宮のわらはそむわうすへてさるへき宮たちの御ことも家のこのきみたちみなえらひいてたまふ殿上のきみたちもかたちよくおなしきまひのすかたも心ことなるへきをさためてあまたのまひのまうけをせさせ給いみしかるへきたひのことゝてみな人心をつくし給てなむみち　くのものゝし上手いとまなきころ也宮はもとより琴の御ことをなむならひ給ひけるをいとわかくて院にもひきわかれたてまつりたまひしかはおほつかなくおほしてまいりたまはむつゐてにかの御ことのねなむきかまほしきさりとも琴はかりはひきとり給

へらむとしりうことにきこえ給けるを内にもきこしめしてけにさりともけはひことならむかし院の御まへにてゝつくし給はむついてにまいりきてきかはやなとのたまはせけるをおとゝの君はつたへきゝ給て年比さりぬへきついてことにはをしへきこゆることもあるをそのけはひはけにまさりたまひにたれとまたきこしめし所ある物ふかき手にはをよはぬをなに心もなくてまいりたまへらむついてにきこしめさむとゆるしなくゆかしからせ給はむはいとはしたなかるへき事にもといとおしくおほしてこのころそ御心とゝめてをしへきこえたまふしらへことなる手ふたつみつおもしろき大こくともの四季につけてかはるへきひゝきそらのさむさぬるさをとゝのへいてゝやむことなかるへき手のかきりをとりたてゝをしへきこえたまふに心もとなくおはするやうなれとやう　く心えたまふまゝにいとよくなり給ひるはいと人しけくなをひとたひもゆしあむするいとまも心あはたゝしけれはよる　くなむしつかにことの心もしめたてまつるへきとてたいにもそのころは御いとまきこえ給てあけくれをしへきこえ給女御のきみにもたいのうへにも琴はならはしたてまつり給はさりけれはこのおりおさ

　くみゝなれぬ手ともひき給らんをゆかしとおほして女御もわさとありかたき御いとまをたゝしはしときこえ給てまかてたまへりみこふた所をはするを又もけしきはみ給ていつ月許にそなり給へれは神わさなとに事つけておはしますなりけり十一月すくしてはまいり給へき御せうそこうちしきりあれとかゝるついてにかくおもしろきよる　くの御あそひをうらやましくなとてわれにつたへ給はさりけむとつらく思ひきこえ給冬の夜の月は人にたかひてめてたまふ御心なれはおもしろき夜のゆきの光におりにあひたる手ともひきたまひつゝさふらふ人ゝもすこしこのかたにほのめきたるに御ことゝもとり　くにひかせてあそひなとし給年のくれつかたはたいなとにはいそかしくこなたかなたの御いとなみにをのつから御らむしいるゝ事ともあれは春のうらゝかならむ夕へなとにいかてこの御ことのねきかむとのたまひわたるにとしかへりぬ院の御賀まつおほやけよりせさせ給ことゝもこちたきにさしあひてはひんなくおほされてすこしほとすこしたまふ二月十よ日とさためたまひてかくにんまひ人なとまいりつゝ御あそひたえすこのたいにつねにゆかしくする御ことのねいかてかの人ゝのさうひはのねもあはせて女かく心みさせむたゝいまのものゝ上手ともこそさらにこのわたりの人ゝのみ心しらひともにまさらねはか　くしくつたへとりたる事はおさ　くなけれとなに事もいかて心にしらぬことあらしとなむをさなきほとに思ひしかは世にあるものゝしといふかきり又たかきいへ　くのさるへき人のつ

たへともゝのこさす心みし中にいとふかくはつかしきかなとおほゆるきはの人
なむなかりしそのかみよりも又このころのわかき人〻のされよしめきすくすに
はたあさくなりにたるへしきむはたましてさらにまねふ人なくなりにたりとか
この御ことのねはかりたにつたへたる人おさ　くあらしとのたまへはなにこゝ
ろなくうちゑみてうれしくかくゆるしたまふほとになりにけるとおほす廿一二
はかりになりたまへとなをいといみしくかたなりにきひはなる心ちしてほそく
あえかにうつくしくのみみえたまふ院にもみえたてまつり給はてとしへぬるを
ねひまさり給にけりと御らんすはかりよういくわへてみえたてまつりたまへと
事にふれてをしへきこえたまふけにかゝる御うしろみなくてはましていはけな
くおはします御ありさまかくれなからましと人〻もみたてまつる正月廿日許に
なれはそらもおかしきほとに風ぬるくふきておまへのむめもさかりになりゆき
おほかたの花の木ともゝみなけしきはみかすみわたりにけり月たゝは御いそき
ちかく物さはかしからむにかきあはせ給はむ御ことのねもしかくめきて人いひ
なさむをこのころしつかなるほとに心み給へとてしむてんにわたしたてまつり
給ふ御ともにわれも　くと物ゆかしかりてまうのほらまほしかれとこなたにと
をきをはえりとゝめさせ給てすこしねひたれとよしあるかきりえりてさふらは
せ給ふわらはへはかたちすくれたる四人あか色にさくらのかさみうすいろのを
りものゝあこめうきもんのうへのはかまくれなゐのうちたるさまもてなしすく
れたるかきりをめしたり女御の御方にも御しつらひなといとゝあらたまれるこ
ろのくもりなきにをの　くいとましくつくしたるよそおひともあさやかににな
しわらはゝあをいろにすわうのかさみからあやのうへのはかまあこめは山ふき
なるからのきをおなしさまにとゝのへたりあかしの御方のはこと　くしからて
こうはいふたりさくらふたりあをしのかきりにてあこめこくうすくうちめなと
えならてきせたまへり宮の御方にもかくつとひたまふへくきゝ給てわらはへの
すかたはかりはことにつくろはせたまへりあをにゝやなきのかさみえひそめの
あこめなとことにこのましくめつらしきさまにはあらねとおほかたのけはひの
いかめしくけたかきことさへいとならひなしひさしの中の御さうしをはなちて
こなたかなたみ木ちやうはかりをけちめにて中のまは院のおはしますへきおま
しよそひたりけふの拍子あはせにはわらはへをめさむとて右のおほいとのゝ三
らうかむのきみの御はらのあに君さうのふえ左大将の御たらうよこふえとふか
せてすのこにさふらはせたまふ内には御しとねともならへて御ことゝもまいり
わたすひしたまふ御ことゝもうるはしきこんちのふくろともにいれたるとりい

てゝあかしの御方には琵琶むらさきのうへには和琴女御のきみにさうの御こと
宮にはかくこと　くしきことはまたえひきたまはすやとあやうくてれいのてな
らし給へるをそしらへてたてまつり給さうの御ことはゆるふとなけれとなをか
くものにあはするおりのしらへにつけてことちのたちとみたるゝ物也よくその
心しらひとゝのふへきを女はえはりしつめしなを大将をこそめしよせつへかめ
れこのふえふきともまたいとをさなけにて拍子とゝのへむたのみつよからすと
わらひ給て大将こなたにとめせは御方　くはつかしく心つかひしておはすあか
しの君をはなちてはいつれもみなすてかたき御弟子ともなれは御心くはへて大
将のきゝたまはむになんなかるへくとおほす女御はつねにうへのきこしめすに
もものにあはせつゝひきならし給つれはうしろやすきを和こんこそいくはくな
らぬしらへなれとあとさたまりたる事なくて中　く女のたとりぬへけれ春のこ
とのねはみなかきあはするものなるをみたるゝ所もやとなまいとおしくおほす
大将いといたく心けさうしておまへのこと　くしくうるはしき御こゝろみあら
むよりもけふの心つかひはことにまさりておほえ給へはあさやかなる御なおし
かうにしみたる御そともそていたくたきしめてひきつくろひてまいり給ほとく
れはてにけりゆへあるたそかれ時のそらに花はこそのふる雪思いてられてえた
もたわむはかりさきみたれたりゆるらかにうちふく風にえならすにほひたるみ
すの内のかほりもふきあはせてうくひすさそふつまにしつへくいみしきおとゝ
のあたりのにほひ也みすのしたよりさうの御ことのすそすこしさしいてゝかる
　くしきやうなれとこれかをとゝのへてしらへ心み給へこゝに又うとき人のい
るへきやうもなきをとのたまへはうちかしこまりてたまはり給ほとよういおほ
くめやすくていちこちてうのこゑにはつのをゝたてゝふともしらへやらてさふ
らひ給へはなをかきあはせ許は手ひとつすさましからてこそとのたまへはさら
にけふの御あそひのさしいらへにましらふ許の手つかひなんおほえす侍けると
けしきはみたまふさもあることなれと女かくにえことませてなむにけにけると
つたはらむ名こそおしけれとてわらひ給しらへはてゝおかしきほとにかきあは
せはかりひきてまいらせたまひつこの御むまこの君たちのいとうつくしきとの
ゐすかたともにてふきあはせたる物の手ともまたわかけれとおいさきありてい
みしくおかしけなり御ことゝものしらへともとゝのひはてゝかきあはせ給へる
ほといつれとなきなかにひはゝすくれて上手めき神さひたるてつかひすみはて
ておもしろくきこゆ和こんに大将もみゝとゝめ給へるになつかしくあいきやう
つきたる御つまをとにかきかへしたるねのめつらしくいまめきてさらにこのわ

さとある上手とものおとろ　くしくかきたてたるしらへてうしにをとらすにきはゝしくやまとことにもかゝる手ありけりときゝおとろかるふかき御らうのほとあらはにきこえておもしろきにおとゝ御心おちゐていとありかたくおもひきこえ給さうの御ことはものゝひま　くに心もとなくもりいつるものゝねからにてうつくしけになまめかしくのみきこゆきむはなをわかき方なれとならひ給さかりなれはたと　くしからすいとよく物にひゝきあひていうになりにける御ことのねかなと大将きゝ給拍子とりてさうかし給院も時　くあふきうちならしてくはへ給御こゑむかしよりもいみしくおもしろくすこしふつゝかに物　くしきけそひてきこゆ大将もこゑいとすくれたまへる人にて夜のしつかになりゆくまゝにいふかきりなくなつかしき夜の御あそひなり月心もとなきころなれはとうろこなたかなたにかけて火よきほとにともさせ給へり宮の御方をのそき給へれは人よりけにちいさくうつくしけにてたゝ御そのみある心ちすにほひやかなる方はをくれてたゝいとあてやかにおかしく二月の中十日許のあをやきのわつかにしたりはしめたらむ心ちしてうくひすのはかせにもみたれぬへくあえかにみえ給さくらのほそなかに御くしはひたりみきよりこほれかゝりてやなきのいとのさましたりこれこそはかきりなき人の御ありさまなめれとみゆるに女御のきみはおなしやうなる御なまめきすかたのいますこしにほひくはゝりてもてなしけはひ心にくゝよしあるさまし給てよくさきこほれたるふちの花の夏にかゝりてかたはらにならふ花なきあさほらけの心ちそし給へるさるはいとふくらかなるほとになり給てなやましくおほえ給けれは御こともおしやりてけうそくにおしかゝり給へりさゝやかになよひかゝり給へるに御けうそくはれいのほとなれはをよひたる心ちしてことさらにちいさくつくらはやとみゆるそいとあはれけにおははしけるこうはいの御そに御くしのかゝりはら　くときよらにてほかけの御すかた世になくうつくしけなるにむらさきのうへはえひそめにやあらむ色こきこうちきうすゝわうのほそなかに御くしのたまれるほとこちたくゆるらかにおほきさなとよきほとにやうたいあらまほしくあたりにゝほひみちたる心ちして花といはゝさくらにたとへてもなをものよりすくれたるけはひことに物し給かゝる御あたりにあかしはけをさるへきをいとさしもあらすもてなしなとけしきはみはつかしく心のそこゆかしきさましてそこはかとなくあてになまめかしくみゆ柳のをりものゝほそなかにもえきにやあらむこうちきゝてうすものゝものはかなけなるひきかけてことさらひけしたれとけはひ思ひなしも心にくゝあなつらはしからすこまのあをちのにしきのはしさしたるしとねにまほにもゐて

ひはをうちをきてたゝけしき許ひきかけてたをやかにつかひなしたるはちのもてなしねをきくよりも又ありかたくなつかしくてさ月まつ花たちはなのはなもみもくしてをしおれるかほりおほゆこれもかれもうちとけぬ御けはひとももをきゝみ給に大将もいと内ゆかしくおほえ給たいのうへのみしおりよりもねひまさりたまへらむありさまゆかしきにしつ心もなし宮をはいますこしのすくせをよはましかはわかものにてもみたてまつりてまし心のいとぬるきそくやしきや院はたひ　くさやうにおもむけてしりう事にものたまはせけるをとねたく思へとすこし心やすき方にみえたまふ御けはひにあなつりきこゆとはなけれといとしも心はうこかさりけりこの御方をはなにこともおもひをよふへきかたなくけとをくてとしころすきぬれはいかてかたゝおほかたに心よせあるさまをもみえたてまつらむと許のくちおしくなけかしきなりけりあなかちにあるましくおほけなき心ちなとはさらにものし給はすいとよくもておさめ給へり夜ふけゆくけはひひやゝかなりふしまちの月はつかにさしいてたる心もとなしや春のおほろ月よゝ秋のあはれはたかうやうなるものゝねにむしのこゑよりあはせたるたゝならすこよなくひゝきそふ心ちすかしとのたまへは大将の君秋のよのくまなき月にはよろつのものゝとゝこほりなきにことふえのねもあきらかにすめる心ちはし侍れとなをことさらにつくりあはせたるやうなるそらのけしき花のつゆにも色　くめうつろひ心ちりてかきりこそ侍れ春のそらのたと　くしきかすみのまよりおほろなる月かけにしつかにふきあはせたるやうにはいかてかふえのねなともえむにすみのほりはてすなむ女は春をあはれふとふるき人のいひをき侍けるけにさなむ侍けるなつかしくものゝとゝのほる事は春のゆふくれこそことに侍けれと申給へはいなこのさためよいにしへより人のわきかねたることをするゑの世にくたれる人のえあきらめははつましくこそものゝしらへこくのものともはしもけにりちをはつきのものにしたるはさもありかしなとのたまひていかにたゝいまいうそくおほえたかきその人かの人御前なとにてたひ　く心みさせ給にすくれたるはかすゝくなくなりためるをそのこのかみとおもへる上手ともいくはくえまねひとらぬにやあらむこのほのかなる女たちの御中にひきませたらむにきはゝなるへくこそおほえねとしころかくむもれてすくすにみゝなともすこしひか　くしくなりにたるにやあらむくちおしうなむあやしく人のさえはかなくとりすることゝもゝものゝはえありてまさるところなるその御前の御あそひなとにひときさみにえらはるゝ人　くそれかれといかにそとの給へは大将それをなむとり申さむと思ひ侍りつれとあきらかならぬ心のまゝにおよすけてや

はと思給ふるのほりての世をきゝあはせ侍らねはにや衛門督の和琴兵部卿宮の御ひわなとをこそこのころめつらかなるためしにひきいて侍めれけにかたはらなきをこよひうけたまはるものゝねとものみなひとしくみゝおとろき侍はなをかくわさともあらぬ御あそひとかねて思給へたゆみける心のさはくにや侍らむさうかなといとつかうまつりにくゝなむ和琴はかのおとゝ許こそかくをりにつけてこしらへなひかしたるねなと心にまかせてかきたて給へるはいとことにものし給へおさ　くきははなれぬ物に侍へめるをいとかしこくとゝのひてこそ侍りつれとめてきこえたまふいとさこと　くしきゝはにはあらぬをわさとうるはしくもとりなさるゝかなとてしたりかほにほゝゑみたまふけにけしうはあらぬ弟子ともなりかし琵琶はしもこゝにくちいるへきことましらぬをさいへと物のけはひことなるへしおほえぬ所にてきゝはしめたりしにめつらしきものゝこゑかなとなむおほえしかとそのおりよりは又こよなくまさりにたるをやとせめてわれかしこにかこちなし給へは女房なとはすこしつきしろふよろつのことみち　くにつけてならひまねはゝさえといふ物いつれもきはなくおほえつゝわか心ちにあくへきかきりなくならひととむ事はいとかたけれとなにかはそのたとりふかき人のいまの世におさ　くなけれはかたはしをなたらかにまねひえたらむ人さるかたかとに心をやりてもありぬへきを琴なむ猶わつらはしく手ふれにくき物はありけるこのことはまことにあとのまゝにたつねとりたるむかしの人は天地をなひかしおに神の心をやわらけよろつのものゝねのうちにしたかひてかなしひふかきものもよろこひにかはりいやしくまつしき物もたかき世にあらたまりたからにあつかり世にゆるさるゝたくひおほかりけりこのくにゝひきつたふるはしめつかたまてふかくこの事を心えたる人はおほくのとしをしらぬくにゝすこし身をなきになしてこのことをまねひとらむとまとひてたにしうるはかたくなむありけるけにはたあきらかにそらの月ほしをうこかし時ならぬしもゆきをふらせくもいかつちをさはかしたるためしあかりたる世にはありけりかくかきりなき物にてそのまゝにならひとる人のありかたく世のすゑなれはにやいつこのそのかみのかたはしにかはあらむされとなをかのおに神のみゝとゝめかたふきそめにける物なれはにやなま　くにまねひて思かなはぬたくひありけるのちこれをひく人よからすとかいふなむをつけてうるさきまゝにいまはおさ　くつたふる人なしとかいとくちおしき事にこそあれきんのねをはなれてはなにことをかものをとゝのへしる　くへとはせむけによろつのことおとろふるさまはやすくなりゆく世の中にひとりいてはなれて心をたてゝもろこしこまとこ

の世にまとひありきおやこをはなれむことは世中にひかめる物になりぬへしなとかなのめにてなをこのみちをかよはししるはかりのはしをはしりをかさらむしらへひとつに手をひきつくさんことたにはかりもなき物なゝりいはむやおほくのしらへわつらはしきこくおほかるを心にいりしさかりには世にありとありこゝにつたはりたるふといふものゝかきりをあまねくみあはせてのち　くは師とすへき人もなくてなむこのみならひしかと猶あかりての人にはあたるへくもあらしをやましてこのゝちといひてはつたはるへきすゑもなきいとあはれになむなとのたまへは大将けにいとくちおしくはつかしとおほすこの御子たちの御中におもふやうにおいゝて給ものしたまはゝそのよになむそもさまてなからへとまるやうあらはいくはくならぬてのかきりもとゝめたてまつるへき二宮いまよりけしきありてみえたまふをなとのたまへはあかしの君はいとおもたゝしくなる涙くみてきゝゐたまへり女御のきみはさうの御ことをはうへにゆつりきこえてよりふし給ひぬれはあつまをおとゝの御まへにまいりてけちかき御あそひになりぬかつらきあそひ給はなやかにおもしろしおとゝおりかへしうたひ給御こゑたとへんかたなくあいきやうつきめてたし月やう　くさしあかるまゝに花の色かももてはやされてけにいと心にくきほと也さうのことは女御の御つまをとはいとらうたけになつかしくはゝ君の御けはひくはゝりてゆのねふかくいみしくすみてきこえつるをこの御てつかひは又さまかはりてゆるゝかにおもしろくきく人たゝならすすゝろはしきまてあいきやうつきてりむの手なとすへてさらにいとかとある御こととのねなりかへりこゑにみなしらへかはりてりちのかきあはせともなつかしくいまめきたるにきんはこかのしらへあまたの手のなかに心とゝめてかならすひき給へき五六のはちをいとおもしろくすましてひき給さらにかたほならすいとよくすみてきこゆ春秋よろつのものにかよへるしらへにてかよはしわたしつゝひき給心しらひをしへきこえ給さまたかへすいとよくわきまへたまへるをいとうつくしくおもたゝしく思ひきこえ給このきみたちのいとうつくしくふきたてゝせちに心いれたるをらうたかり給てねふたくなりにたらむにこよひのあそひはなかくはあらてはつかなるほとにと思ひつるをとゝめかたきものゝねとものいつれともなきをきゝわくほとのみゝとからぬたと　くしさにいたくふけにけり心なきわさなりやとてさうのふえふくきみにかはらけさし給て御そぬきてかつけ給よこふえのきみにはこなたよりをりものゝほそなかにはかまなとこと　くしからぬさまにけしきはかりにて大将の君には宮の御方よりさか月さしいてゝ宮の御さうそくひとくたりかつけたてまつり給をおとゝあ

やしやものゝ師をこそまつはものめかし給はめうれはしき事也とのたまふに宮のおはしますみ木ちやうのそはより御ふえをたてまつるうちわらひ給てとり給いみしきこまふえなりすこしふきならし給へはみなたちいて給ほとに大将たちとまり給て御このもちたまへるふえをとりていみしくおもしろくふきたて給へるかいとめてたくきこゆれはいつれも　くみな御手をはなれぬものゝつたへ

　くいとになくのみあるにてそわか御さえの程ありかたくおほしゝられける大将殿はきみたちを御くるまにのせて月のすめるにまかて給みちすからさうのことのかはりていみしかりつるねもみゝにつきてこひしくおほえたまふわか北の方は故大宮のをしへきこえ給しかと心にもしめ給はさりしほとにわかれたてまつりたまひにしかはゆるゝかにもひきとりたまはておとこ君の御まへにてははちてさらにひきたまはすなにこともたゝおひらかにうちをほときたるさましてこともものあつかひをいとまなくつき　くし給へはおかしき所もなくおほゆさすかにはらあしくてものねたみうちしたるあいきやうつきてうつくしき人さまにそものし給める院はたいへわたり給ひぬうへはとまり給て宮にも御ものかたりなときこえたまひてあか月にそわたり給へるひたかうなるまておほとのこもれり宮の御ことのねはいとうるさくなりにけりないかゝきゝ給しときこえ給へははしめつかたあなたにてほのきゝしはいかにそやありしをいとこよなくなりにけりいかてかはかくこと事なくをしへきこえたまはむにはといらへきこえたまふさかしてをとる　くおほつかなからぬものゝ師なりかしこれかれにもうるさくわつらはしくていとまいるわさなれはおしへたてまつらぬを院にも内にも琴はさりともならはしきこゆらむとのたまふときくかいとおしくさりともさはかりのことをたにかくとりわきて御うしろみにとあつけたまへるしるしにはと思ひおこしてなむなときこえ給ついてにもむかしよつかぬほとをあつかひ思ひしさまその世にはいとまもありかたくて心のとかにとりわきをしへきこゆる事なともなくちかき世にもなにとなくつき　くまきれつゝすくしてきゝあつかはぬ御ことのねのいてはへしたりしもめむほくありて大将のいたくかたふきおとろきたりしけしきも思ふやうにうれしくこそありしかなときこえ給かやうのすちもいまは又おとな　くしく宮たちの御あつかひなとゝりもちてし給さまもいたらぬ事なくすへてなにことにつけてももとかしくたと　くしきことましらすありかたき人の御ありさまなれはいとかくくしぬる人はよにひさしからぬためしもあなるをとゆゝしきまて思ひきこえ給さま　くなる人のありさまをみあつめたまふまゝにとりあつめたらひたることはまことにたくひあらしとのみ思ひき

こえ給へりことしは三十七にそなり給みたてまつり給し年月のことなともあはれにおほしいてたるついてにさるへき御いのりなとつねよりもとりわきてことしはつゝしみたまへものさはかしくのみありておもひいたらぬ事もあらむを猶おほしめくらしておほきなることゝもし給はゝをのつからせさせてむこそうつのものし給はすなりにたるこそいとくちおしけれおほかたにてうちたのまむにもいとかしこかりし人をなとのたまひいつみつからはをさなくより人にことなるさまにてこと　くしくおいいてゝいまの世のおほえありさまきしかたにたくひすくなくなむありけるされと又よにすくれてかなしきめをみるかたも人にはまさりけりかしまつは思ふ人にさま　くをくれのこりとまれるよはひのするにもあかすかなしと思ふことおほくあちきなくさるましきことにつけてもあやしくものおもはしく心にあかすおほゆることそひたる身にてすきぬれはそれにかへてやおもひしほとよりはいまゝてもなからふるならむとなん思ひしらるゝ君の御身にはかのひとふしのわかれよりあなたこなた物思ひとて心みたり給許のことあらしとなんおもふきさきといひましてそれよりつき　くはやむことなき人といへとみなかならすやすからぬ物おもひそふわさ也たかきましらひにつけても心みたれ人にあらそふ思ひのたえぬもやすけなきをおやのまとの内なからすくしたまへるやうなる心やすきことはなしその方人にすくれたりけるすくせとはおほししるや思ひのほかにこの宮のかくわたりものし給へるこそはなまくるしかるへけれとそれにつけてはいとゝくはふる心さしのほとを御身つからのうへなれはおほししらすやあらむものゝ心もふかくしり給めれはさりともとなむ思ふときこえたまへはのたまふやうに物はかなき身にはすきにたるよそのおほえはあらめと心にたえぬものなけかしさのみうちそふやさはみつからのいのりなりけるとてのこりおほけなるけはひはつかしけなりまめやかにはいとゆくさきすくなき心ちするをことしもかくしらすかほにてすくすはいとうしろめたくこそさき　くもきこゆる事いかて御ゆるしあらはときこえ給それはしもあるましき事になんさてかけはなれ給ひなむ世にのこりてはなにのかひかあらむたゝかくなにとなくてすくる年月なれとあけくれのへたてなきうれしさのみこそますことなくおほゆれ猶思ふさまことなる心のほとをみはて給へとのみきこえ給をれいのことゝ心やましくてなみたくみたまへるけしきをいとあはれにみてまつり給てよろつにきこえまきらはし給おほくはあらねと人のありさまのとり　くにくちおしくはあらぬをみしりゆくまゝにまことのこゝろはせおひらかにおちゐたるこそいとかたきわさなりけれとなむ思ひはてにたる大将のはゝ君

をおさなかりしほとにみそめてやむことなくえさらぬすちには思ひしをつねに
なかよからすへたてある心ちしてやみにしこそいま思へはいとおしくゝやしく
もあれ又わかあやまちにのみもあらさりけりなと心ひとつになむ思ひいつるう
るはしくをもりかにてそのことのあかぬかなとおほゆる事もなかりきたゝいと
あまりみたれたる所なくすく　くしくすこしさかしとやいふへかりけむと思ふ
にはたのもしくみるにはわつらはしかりし人さまになん中宮の御はゝみやす所
なんさまことに心ふかくなまめかしきためしにはまつ思ひいてらるれと人みえ
にくゝくるしかりしさまになんありしうらむへきふしそけにことはりとおほゆ
るふしをやかてなかくおもひつめてふかくゑんせられしこそいとくるしかりし
か心ゆるひなくはつかしくて我も人もうちたゆみあさゆふのむつひをかはさむ
にはいとつゝましき所のありしかはうちとけてはみおとさるゝ事やなとあまり
つくろひしほとにやかてへたゝりし中そかしいとあるましき名をたちて身のあ
は　くしくなりぬるなけきをいみしく思ひしめ給へりしかいとおしくけに人か
らをおもひしも我つみある心ちしてやみにしなくさめに中宮をかくさるへき御
契とはいひなからとりたてゝ世のそしり人のうらみをもしらす心よせたてまつ
るをかの世なからもみなおされぬらむ今もむかしもなをさりなる心のすさひに
いとおしくゝやしき事もおほくなんときし方の人の御うへすこしつゝのたまひ
いてゝ内の御方の御うしろみはなに許のほとならすとあなつりそめて心やすき
ものにおもひしを猶心のそこみえすきはなくふかき所ある人になむうはへは人
になひきおひらかにみえなからうちとけぬけしきしたにこもりてそこはかとな
くはつかしき所こそあれとのたまへはこと人はみねはしらぬをこれはまほなら
ねとをのつからけしきみるおり　くもあるにいとうちとけにくゝ心はつかしき
ありさましるきをいとたとしへなきうらなさをいかにみ給らんとつゝましけれ
と女御はをのつからおほしゆるすらんとのみ思ひてなむとのたまふさはかりめ
さましと心をき給へりし人をいまはかくゆるしてみえかはしなとし給も女御の
御ためのま心なるあまりそかしとおほすにいとありかたけれは君こそはさすか
にくまなきにはあらぬものから人により事にしたかひいとよくふたすちに心つ
かひはし給けれさらにこゝらみれと御ありさまにゝたる人はなかりけりいとけ
しきこそものし給へとほゝゑみてきこえ給宮にいとよくひきとり給へりしこと
のよろこひきこえむとてゆふつかたわたり給ぬわれに心をく人やあらむともお
ほしたゝすいといたくわかひてひとへに御ことに心いれておはすいまはいとま
ゆるしてうちやすませ給へかし物の師は心ゆかせてこそいとくるしかりつる日

ころのしるしありてうしろやすくなり給にけりとて御ことゝもおしやりておほとのこもりぬたいにはれいのおはしまさぬ夜はよゐゐしたまひてひと　くに物かたりなとよませてきゝ給かく世のたとひにいひあつめたるむかしかたりともにもあたなる男色このみふた心ある人にかゝつらひたる女かやうなる事をいひあつめたるにもつゐによるかたありてこそあめれあやしくうきてもすくしつるありさまかなけにのたまひつるやうに人よりことなるすくせもありける身なから人のしのひかたくあかぬ事にするもの思ひはなれぬ身にてやゝみなむとすらんあちきなくもあるかななと思ひつゝけて夜ふけておほとのこもりぬるあか月かたより御むねをなやみ給人〳〵みたてまつりあつかひて御せうそこきこえさせむときこゆるをいとひんないことゝせいし給てたへかたきをおさへてあかしたまふつ御身もぬるみて御心ちもいとあしけれと院もとみにわたりたまはぬ程かくなむともきこえす女御の御かたより御せうそこあるにかくなやましくてなむときこえ給えるにおとろきてそなたよりきこえたまへるにむねつふれていそきわたり給へるにいとくるしけにておはすいかなる御心ちそとてさくりたてまつり給へはいとあつくおはすれはきのふきこえ給し御つゝしみのすちなとおほしあはせ給ていとおそろしくおほさる御かゆなとこなたにまいらせたれと御覧しもいれすひゝとひそひおはしてよろつにみたてまつりなけき給はかなき御くた物をたにいと物うくし給ておきあかり給事たえて日ころへぬいかならむとおほしさはきて御いのりともかすしらすはしめさせ給そうめして御かちなとせさせ給そこ所ともなくいみしくくるしくし給てむねは時〳〵おこりつゝわつらひ給さまたへかたくくるしけなりさま　くの御つゝしみかきりなけれとしるしもみえすをもしとみれとをのつからをこたるけちめあらはたのもしきをいみしく心ほそくかなしとみたてまつり給にこと事おほされねは御賀のひゝきもしつまりぬかの院よりもかくわつらひ給よしきこしめして御とふらひいとねんころにたひ　くきこえ給おなしさまにて二月もすきぬいふかきりなくおほしなけきて心みに所をかへ給はむとて二条院にわたしたてまつり給ひつ院のうちゆすりみちて思ひなけく人おほかり冷泉院もきこしめしなけくこの人うせたまはゝ院もかならす世をそむく御ほいとけたまひてむと大将の君なとも心をつくしてみたてまつりあつかひ給てみすほうなとはおほかたのをはさる物にてとりわきてつかうまつらせ給いさゝか物おほしわくひまにはきこゆる事をさも心うくとのみうらみきこえ給へとかきりありてわかれはて給はむよりもめのまへにわか心とやつしすて給はむ御ありさまをみてはさらにかた時たふましくのみおしくかなしか

るへけれはむかしよりみつからそかゝるほいふかきをとまりてさう　くしくおほされん心くるしさにひかれつゝすくすをさかさまにうちすてたまはむとやおほすとのみおしみきこえ給にけにいとたのみかたけによはりつゝかきりのさまにみえ給おり　くおほかるをいかさまにせむとおほしまとひつゝ宮の御方にもあからさまにわたりたまはす御ことゝもすさましくてみなひきこめられ院のうちの人〻はみなあるかきり二条院につとひまいりてこの院には火をけちたるやうにてたゝ女とちおはして人ひとりの御けはひなりけりとみゆ女御のきみもわたり給てもろともにみたてまつりあつかひたまふたゝにもおはしまさて物のけなといとおそろしきをはやくまいりたまひねとくるしき御心地にもきこえ給わか宮のいとうつくしうておはしますをみたてまつり給てもいみしくなき給てをとなひたまはむをえみたてまつらすなりなむことわすれ給なんかしとの給へは女御せきあへすかなしとおほしたりゆゝしくかくなおほしそさりともけしうはものし給はし心によりなん人はともかくもあるをきてひろきうつは物にはさいはひもそれにしたかひせはき心ある人はさるへきにてたかきみとなりてもゆたかにゆるへるかたはをくれきうなる人はひさしくつねならす心ぬるくなたらかなる人はなかきためしなむおほかりけるなと仏神にもこの御心はせのありかたくつみかろきさまを申あきらめさせたまふみす法のあさりたちよゐなとにてもちかくさふらふかきりのやむことなきそうなともいとかくおほしまとへる御けはひをきくにいといみしく心くるしけれは心をおこしていのりきこゆすこしよろしきさまにみえ給時五六日うちませつゝ又をもりわつらひ給こといつとなくて月日をへ給は猶いかにおはすへきにかよかるましき御心ちにやとおほしなけく御物のけなといひていてくるもなしなやみたまふさまそこはかとみえすたゝひにそへてよはり給さまにのみゝゆれはいとも　くかなしくいみしくおほすに御心のいとまもなけなりまことや衛門督は中納言になりにきかしいまの御世にはいとしたしくおほされていと時の人也身のおほえまさるにつけても思ふことのかなはぬうれはしさを思ひわひてこの宮の御あねの二宮をなむえたてまつりてける下らうのかういはらにおはしましけれは心やすきかたましりて思ひきこえ給へり人からもなへての人におもひなすらふれはけはひこよなくおはすれともとよりしみにしかたこそなをふかゝりけれなくさめかたきをはすてにて人めにとかめらるましきはかりにもてなしきこえ給へりなをかのしたの心わすられすこ侍従といふかたらひ人は宮の御侍従のめのとのむすめなりけりそのめのとのあねそかのかんの君の御めのとなりけれはゝやくよりけちかくきゝたてまつ

りてまた宮をさなくおはしましゝ時よりいときよらになむおはしますみかとのかしつきたてまつりたまふさまなときゝをきたてまつりてかゝるおもひもつきそめたるなりけりかくて院もはなれおはしますほと人めすくなくしめやかならむをおしはかりてこしゝうをむかへとりつゝいみしうかたらふむかしよりかくいのちもたふましく思ふことをかゝるしたしきよすかありて御ありさまをきゝつたへたえぬ心のほとをもきこしめさせてたのもしきにさらにそのしるしのなけれはいみしくなんつらき院のうへたにかくあまたにかけ　くしくて人におされ給やうにてひとりおほとのこもるよな　くおほくつれ　くにてすくし給なりなと人のそうしけるついてにもすこしくいおほしたる御けしきにておなしくはたゝ人の心やすきうしろみをさためむにはまめやかにつかうまつるへき人をこそさたむへかりけれとのたまはせて女二の宮の中　くうしろやすくゆくするゑなかきさまにてものし給なる事とのたまはせけるをつたへきゝしにいとおしくもくちおしくもいかゝ思みたるゝけにおなし御すちとはたつねきこえしかとそれはそれとこそおほゆるわさなりけれとうちうめき給へはこしゝういてあなおほけなそれをそれとさしをきたてまつり給て又いかやうにかきりなき御心ならむといへはうちほゝゑみてさこそはありけれ宮にかたしけなくきこえさせをよひけるさまは院にも内にもきこしめしけりなとてかはさてもさふらはさらましとなむことのついてにはのたまはせけるいてやたゝいますこしの御いたはりあらましかはなといへはいとかたき御事也や御すくせとかいふこと侍なるをもとにてかの院の事にいてゝねんころにきこえ給ふにたちならひさまたけきこえさせ給へき御身のおほえとやおほされしこのころこそすこし物　くしく御その色もふかくなり給へれといへはいふかひなくはやりかなるくちこはさにえいひはて給はていまはよしすきにしかたをはきこえしやたゝかくありかたきものゝひまにけちかきほとにてこの心のうちに思ふことのはしすこしきこえさせつへくたはかり給へおほけなき心はすへてよしみ給へいとおそろしけれは思ひはなれて侍りとのたまへはこれよりおほけなき心はいかゝはあらむいとむくつけき事をもおほしよりけるかなゝにしにまいりつらむとはちふくいてあなきゝにくあまりこちたくものをこそいひなし給へけれ世はいとさためなきものを女御きさきもあるやうありてものしたまふたくひなくやはましてその御ありさまよおもへはいとたくひなくめてたけれとうち　くは心やましきこともおほかるらむ院のあまたの御中に又ならひなきやうにならはしきこえ給ひしにさしもひとしからぬきはの御方　くにたちましりめさましけなることもありぬへくこそいとよく

きゝ侍りや世中はいとつねなき物をひときはに思ひさためてはしたなくつきゝりなる事なのたまひそよとのたまへは人におとされ給へる御ありさまとてめてたき方にあらため給へきにやは侍らむこれは世のつねの御ありさまにも侍らさめりたゝ御うしろみなくてたゝよはしくおはしまさむよりはおやさまにとゆつりきこえ給しかはかたみにさこそ思ひかはしきこえさせ給ためれあいなき御おとしめことになむとはて　くははらたつをよろつにいひこしらへてまことはさはかりよになき御ありさまをみたてまつりなれ給へる御心にかすにもあらすあやしきなれすかたをうちとけて御覧せられんとはさらに思ひかけぬ事なりたゝひとことものこしにてきこえしらす許はなにはかりの御身のやつれにかはあらむ仏神にも思ふ事申すはつみあるわさかはといみしきちかことをしつゝのたまへはしはしこそいとあるましきことにいひかへしけれ物ふかゝらぬわか人は人のかく身にかへていみしく思ひのたまふをえいなひはてゝもしさりぬへきひまあらはたはかり侍らむ院のおはしまさぬ夜はみ帳のめくりに人おほくさふらふておましのほとりにさるへき人かならすさふらひ給へはいかなるおりをかはひまをみつけ侍へるへからむとわひつゝまいりぬいかに　くとひゝにせめられこうしてさるへきおりうかゝひつけてせうそこしおこせたりよろこひなからいみしくやつれしのひておはしぬまことにわかこゝろにもいとけしからぬことなれはけちかくなか　くおもひみたるゝこともまさるへきことまては思ひもよらすたゝいとほのかに御そのつまはかりをみたてまつりし春のゆふへのあかす世とゝもに思ひいてられ給御ありさまをすこしけちかくてみたてまつりおもふことをもきこえしらせてはひとくたりの御かへりなともやみせたまふあはれとやおほししるとそ思ひける四月十よ日はかりの事也みそきあすとて斎院にたてまつり給女房十二人ことに上らうにはあらぬわかき人わらへなとをのかしゝものぬひけさうなとしつゝものみむと思ひまうくるもとり　くにいとまなけにて御前のかたしめやかにて人しけからぬおりなりけりちかくさふらふあせちのきみも時ゝかよふ源中将せめてよひいたさせけれはおりたるまにたゝこのしゝうはかりちかくはさふらふなりけりよきおりとおもひてやをらみ帳のひんかしおもてのおましのはしにするゑつさまてもあるへきことなりやは宮はなに心もなくおほとのこもりにけるをちかくおとこのけはひのすれは院のおはするとおほしたるにうちかしこまりたるけしきみせてゆかのしもにいたきおろしたてまつるにものにをそはるゝかとせめてみあけ給へれはあらぬ人なりけりあやしくきゝゝもしらぬことゝもをそきこゆるやあさましくむくつけくなりて人めせとちかくもさ

ふらはねはきゝつけてまいるもなしわなゝき給さま水のやうにあせもなかれてものもおほえ給はぬけしきいとあはれにらうたけ也かすならねといとかうしもおほしめさるへき身とは思給へられすなむゝかしよりおほけなき心の侍しをひたふるにこめてやみ侍なましかは心のうちにくたしてすきぬへかりけるを中

くもらしきこえさせて院にもきこしめされにしをこよなくもてはなれてものたまはせさりけるにたのみをかけそめ侍て身のかすならぬひときはに人よりふかき心さしをむなしくなし侍ぬることゝうこかし侍にし心なむよろついまはかひなきことゝ思給へかへせといかはかりしみ侍にけるにかとし月にそへてくちおしくもつらくもむくつけくもあはれにも色　くにふかく思給へまさるにせきかねてかくおほけなきさまを御らむせられぬるもかつはいと思ひやりなくはつかしけれはつみをもき心もさらに侍るましといひもてゆくにこの人なりけりとおほすにいとめさましくおそろしくてつゆいらへもし給はすいとことはりなれと世にためしなきことにも侍らぬをめつらかになさけなき御心はへならはいと心うくて中　くひたふる心もこそつき侍れあはれとたにのたまはせはそれをうけたまはりてまかてなむとよろつにきこえ給よその思ひやりはいつくしく物なれてみえたてまつらむ事もはつかしくおしはかられ給にたゝか許おもひつめたるかたはしきこえしらせてなか　くかけ　くしき事はなくてやみなんとおもひしかといとさはかりけたかうはつかしけにはあらてなつかしくらうたけにやは

くとのみゝえたまふ御けはひのあてにいみしくおほゆることそ人にゝさせ給はさりけるさかしく思ひしつむる心もうせていつちも　くゐてかくしたてまつりてわか身もよにふるさまならすあとたえてやみなはやとまて思みたれぬたゝいさゝかまとろむともなきゆめにこの手ならしゝねこのいとらうたけにうちなきてきたるをこの宮にたてまつらむとてわかゐてきたるとおほしきをなにしにたてまつりつらむと思ふほとにおとろきていかにみえつるならむと思ふ宮はいとあさましくうつゝともおほえ給はぬにむねふたかりておほしをほほるゝを猶かくのかれぬ御すくせのあさからさりけるとおもほしなせみつからの心なからもうつし心にはあらすなむおほえ侍かのおほえなかりしみすのつまをねこのつなひきたりしゆふへのこともきこえいてたりけにさはたありけむよとくちおしく契心うき御みなりけり院にもいまはいかてかはみえたてまつらむとかなしく心ほそくていとをさなけになきたまふをいとかたしけなくあはれとみたてまつりて人の御涙をさへのこふそてはいとゝつゆけさのみまさるあけゆくけしきなるにいてむかたなく中　く也いかゝはし侍へきいみしくにくませ給へは又きこ

えさせむ事もありかたきをたゝひとこと御こゑをきかせ給へとよろつにきこえなやますもうるさくわひしくて物のさらにいはれたまはねははて　くはむくつけくこそなり侍ぬれまたかゝるやうはあらしといとうしとおもひきこえてさらはふようなめり身をいたつらにやはなしはてぬいとすてかたきによりてこそかくまても侍れこよひにかきり侍なむもいみしくなむつゆにても御心ゆるしたまふさまなとはそれにかへつるにてもすて侍なましとてかきいたきていつるにはてはいかにしつるそとあきれておほさるすみのまの屏風をひきひろけてとをゝしあけたれはわたとのゝみなみのとのよへいりしかまたあきなからあるにまたあけくれのほとなるへしほのかにもみたてまつらむの心あれはかうしをやをらひきあけてかういとつらき御心にうつし心もうせ侍ぬすこしおもひのとめよとおほされはあはれとたにのたまはせよとをとしきこゆるをいとめつらか也とおほしてものもいはむとおほせとわなゝかれていとわか　くしき御さま也たゝあけにあけゆくにいと心あはたゝしくてあはれなるゆめかたりもきこえさすへきをかくにくませ給へはこそさりともいまおほしあはする事も侍りなむとてのとかならすたちいつるあけくれ秋のそらよりも心つくし也

　おきてゆく空もしられぬあけくれにいつくの露のかゝる袖なりとひきいてゝうれへきこゆれはいてなむとするにすこしなくさめ給て

　あけくれの空にうきみはきえなゝん夢なりけりとみてもやむへくとはかなけにのたまふこゑのわかくおかしけなるをきゝさすやうにていてぬるたましひはまことに身をはなれてとまりぬる心ちす女宮の御もとにもまうてたまはて大殿へそしのひておはしぬるうちふしたれとめもあはすみつるゆめのさたかにあはむこともかたきをさへ思ふにかのねこのありしさまいとこひしくおもひいてらるさてもいみしきあやまちしつる身かな世にあらむこととこそまはゆくなりぬれとおそろしくそらはつかしき心ちしてありきなともし給はす女の御ためはさらにもいはすわか心ちにもいとあるましきことゝいふ中にもむくつけくおほゆれはおもひのまゝにもえまきれありかすみかとの御めをもとりあやまちてことのきこえあらむにかはかりおほえむことゆへは身のいたつらにならむくるしくもおほゆましかいちしるきつみにはあたらすともこの院にめをそはめられたてまつらむ事はいとおそろしくはつかしくおほゆかきりなき女ときこゆれとすこしよつきたる心はえましりうはへはゆへありこめかしきにもしたかはぬしたの心そひたるこそとあることとかゝることにうちなひき心かはし給たくひもありけれこれはふかき心もおはせねとひたおもむきにものおちし給へる御心にたゝ

いましも人のみきゝつけたらむやうにまはゆくはつかしくおほさるれはあかき所にたにえゐさりいてたまはすいとくちおしき身なりけりとみつからおほしゝるへしなやましけになむとありけれはおとゝきゝ給ていみしく御心をつくし給御事にうちそへて又いかにとおとろかせ給てわたり給へりそこはかとくるしけなることもみえ給はすいといたくはちらひしめりてさやかにもみあはせたてまつり給はぬをいとひさしくなりぬるたえまをうらめしくおほすにやといとおしくてかの御心ちのさまなときこえ給ていまはのとちめにもこそあれいまさらにをろかなるさまをみえをかれしとてなんいはけなかりしほとよりあつかひそめてみはなちかたけれはかう月ころよろつをしらぬさまにすくし侍にこそをのつからこのほとすきはみなをし給てむなときこえ給かくけしきもしり給はぬもいとおしく心くるしくおほされて宮は人しれすなみたくましくおほさるかむのきみはまして中　くなる心ちのみまさりておきふしあかしくらしわひたまふまつりのひなとは物見にあらそひゆくきむたちかきつれきていひそゝのかせとなやましけにもてなしてなかめふしたまへり女宮をはかしこまりをきたるさまにもてなしきこえておさ　くうちとけてもみえたてまつり給はすわか方にはなれゐていとつれ　くに心ほそくなかめゐたまへるにわらはへのもたるあふひをみたまひて

　くやしくそつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかさしならぬにとおもふもいと中　くなり世中しつかならぬくるまのをとなとをよその事にきゝて人やりならぬつれ　くにくらしかたくおほゆ女宮もかゝるけしきのすさましけさもみしられ給へはなにことゝはしり給はねとはつかしくめさましきにものおもはしくそおほされける女房なとも物見にみないてゝ人すくなにのとやかなれはうちなかめてさうのことなつかしくひきまさくりておはするけはひもさすかにあてになまめかしけれとおなしくはいまひときはをよはさりけるすくせよと猶おほゆ

　もろかつらおち葉をなにゝひろひけむ名はむつましきかさしなれともとかきすさひゐたるいとなめけなるしりう事なりかしおとゝの君はまれ　くわたり給てえふともたちかへり給はすしつ心なくおほさるゝにたえいり給ひぬとて人まいりたれはさらになにこともおほしわかれす御心もくれてわたり給ふみちの程の心もとなきにけにかの院はほとりのおほちまて人たちさはきたりとのゝうちなきのゝしるけはひいとまか　くしわれにもあらていり給へれは日ころはいさゝかひまみえたまへるをにはかになんかくおはしますとてさふらふかきり我

もをくれたてまつらしとまとふさまともかきりなしみす法とものたんこほちそうなともさるへきかきりこそまかてねほろ　くとさはくをみたまふにさらはかきりにこそはとおほしはへるあさましさになにことかはたくひあらむさりとも物のけのするにこそあらめいとかくひたふるになさはきそとしつめたまひていよ　くいみしき願ともをたてそへさせ給すくれたるけんさとものかきりめしあつめてかきりある御いのちにてこの世つきたまひぬともたゝいましはしのとめたまへ不動尊の御本のちかひありその日かすをたにかけとゝめたてまつりたまへとかしらよりまことにくろけふりをたてゝいみしき心をゝこしてかちしたてまつる院もたゝいまひとたひめをみあはせ給へいとあへなくかきりなりつらむほとをたにえみすなりにけることのくやしくかなしきをとおほしまとへるさまとまり給へきにもあらぬをみたてまつる心地ともたゝおしはかるへしいみしき御心の内を仏もみたてまつり給にや月ころさらにあらはれいてこぬものゝけちいさきわらはにうつりてよはひのゝしるほとにやう　くいきいて給にうれしくもゆゝしくもおほしさはかるいみしくてうせられて人はみなさりねゐむひとゝころの御みゝにきこえむをのれを月ころてうしわひさせ給かなさけなくつらけれはおなしくはおほししらせむとおもひつれとさすかにいのちもたふましく身をくたきておほしまとふをみたてまつれはいまこそかくいみしき身をうけたれいにしへの心のゝこりてこそかくまてもまいりきたるなれは物の心くるしさをえみすくさてつゐにあらはれぬることさらにしられしと思つる物をとてかみをふりかけてなくけはひたゝかのむかしみ給しものゝけのさまとみえたりあさましくむくつけしとおほししみにしことのかはらぬもゆゝしけれはこのわらはのてをとらへてひきすへてさまあしくもせさせ給はすまことにその人かよからぬきつねなといふなる物のたふれたるかなき人のおもてふせなることいひつるもあなるをたしかなるなのりせよ又人のしらさらむことの心にしるく思ひいてられぬへからむをいへさてなむいさゝかにてもしむすへきとのたまへはほろ

くといたくなきて

わか身こそあらぬさまなれそれなから空おほれするきみは君也いとつらし

くとなきさけふものからさすかにものはちしたるけはひかはらす中　くいとうとましく心うけれは物いはせしとおほす中宮の御事にてもいとうれしくかたしけなしとなんあまかけりてもみたてまつれと道ことになりぬれはこのうへまてもふかくおほえぬにやあらむなをみつからつらしと思ひきこえし心のしふなむとまるものなりけるそのなかにもいきてのよに人よりおとしておほしすてし

よりも思ふとちの御物かたりのついてに心よからすにくかりしありさまをのたまひいてたりしなむいとうらめしくいまはたゝなきにおほしゆるしてこと人のいひおとしめむをたにはふきかくし給へとこそ思へとうち思しはかりにかくいみしき身のけはひなれはかくところせきなりこの人をふかくにくしと思きこゆることはなけれとまもりつよくいと御あたりとをき心ちしてえちかつきまいらす御こゑをたにほのかになむきゝ侍るよしいまはこのつみのかろむはかりのわさをせさせ給へす法と経とのゝしる事も身にはくるしくわひしきほのほとのみまつはれてさらにたうときこともきこえねはいとかなしくなむ中宮にもこのよしをつたへきこえ給へゆめ宮つかへのほとに人ときしろひそねむ心つかひたまふな斎宮におはしましゝころほひの御つみかろむへからむくとくの事をかならすせさせ給へいとくやしきことになむありけるなといひつゝくれとものゝけにむかひてものかたりし給はむもかたはらいたけれはふむしこめてうへをは又こと方にしのひてわたしたてまつり給かくうせ給にけりといふこと世の中にみちて御とふらひにきこえ給人ゝあるをいとゆゝしくおほすけふのかへさみにいて給ひけるかむたちめなとかへり給みちにかく人の申せはいといみしきことにもあるかないけるかひありつるさいはひ人のひかりうしなふ日にてあめはそほふるなりけりとうちつけ事し給人もあり又かくたらひぬる人はかならすえなかからぬ事なりなにをさくらにといふふる事もあるはかゝる人のいとゝ世になからへて世のたのしひをつくさはかたはらの人くるしからむいまこそ二品宮はもとの御おほえあらはれ給はめいとおしけにおされたりつる御おほえをなとうちさゝめきけり衛門督きのふくらしかたかりしを思ひてけふは御おとうととも左大弁藤宰相なとおくの方にのせてみ給けりかくいひあへるをきくにもむねうちつふれてなにかうき世にひさしかるへきとうちすしひとりこちてかの院へみなまいり給たしかならぬことなれはゆゝしくやとてたゝおほかたの御とふらひにまいり給へるにかく人のなきさはけはまことなりけりとたちさはき給へり式部卿宮もわたり給ていといたくおほしほれたるさまにてそいり給人の御せうそこもえ申つたへたまはす大将の君なみたをのこひてたちいて給へるにいかに　くゆゝしきさまに人の申つれはしんしかたき事にてなむたゝひさしき御なやみをうけたまはりなけきてまいりつるなとのたまふいとをもくなりて月日へたまへるをこの暁よりたえいり給へりつるを物のけのしたるになむありけるやうやういきいて給やうにきゝなし侍ていまなむみな人心しつむめれとまたいとたのもしけなしや心くるしき事にこそとてまことにいたくなき給へるけしき也めもすこ

しはれたり衛門督わかあやしき心ならひにやこの君のいとさしもしたしからぬまゝはゝの御ことをいたく心しめたまへるかなとめをとゝむかくこれかれまいり給へるよしきこしめしてをもきひやうさのにはかにとちめつるさまなりつるを女房なとは心もえおさめすみたりかはしくさはき侍けるに身つからもえのとめす心あはたゝしき程にてなむことさらになむかくものし給へるよろこひはきこゆへきとのたまへりかむのきみはむねつふれてかゝるおりのらうろうならすはえまいるましくけはひはつかしく思ふも心の内そはらきたなかりけるかくいきいて給てのゝちしもおそろしくおほして又ゝいみしき法ともをつくしてくはへをこなはせ給うつし人にてたにむくつけかりし人の御けはひのまして世かはりあやしきものゝさまになりたまへらむをおほしやるにいと心うけれは中宮をあつかひきこえ給さへそこのおりはものうくいひもてゆけは女の身はみなおなしつみふかきもとゐそかしとなへての世中いとはしくかの又ひとももきかさりし御中のむつものかたりにすこしかたりいて給へりしことをいひいてたりしにまことゝおほしいつるにいとわつらはしくおほさる御くしおろしてむとせちにおほしたれはいむ事のちからもやとて御いたゝきしるし許はさみて五かい許うけさせたてまつり給御かいの師いむことのすくれたるよし仏に申すにもあはれにたうときことましりて人わるく御かたはらにそひゐてなみたおしのこひ給ひつゝ仏をもろ心にねむしきこえ給さま世にかしこくおはする人もいとかく御心まとふことにあたりてはえしつめたまはぬわさなりけりいかなるわさをしてこれをすくひかけとゝめたてまつらむとのみよるひるおほしなけくにほれ　くしきまて御かほもすこしおもやせ給にたり五月なとはましてはれ　くしからぬそらのけしきにえさはやきたまはねとありしよりはすこしよろしきさまなりされとなをたえすなやみわたり給ものゝけのつみすくふへきわさひことに法花経一部つゝくやうせさせ給日ことになにくれとたうときわさせさせ給御まくらかみちかくてもふたんのみと経こゑたうときかきりしてよませ給あらはれそめてはおり　くかなしけなることゝもをいへとさらにこのものゝけさりはてすいとゝあつき程はいきもたえつゝいよ　くのみよはり給へはいはむかたなくおほしなけきたりなきやうなる御心ちにもかゝる御けしきを心くるしくみたてまつり給て世中になくなりなんもわか身にはさらにくちおしきことのこるましけれとかくおほしまとふめるにむなしくみなされたてまつらむかいと思ひくまなかるへけれはおもひおこして御ゆなといさゝかまいるけにや六月になりてそ時　く御くしもたけ給けるめつらしくみたてまつり給にも猶いとゆゝしくて六条院にはあ

からさまにもえわたり給はすひめ宮はあやしかりしことをおほしなけきしより
やかてれいのさまにもおはせすなやましくし給へとおとろ　くしくはあらすた
ちぬる月より物きこしめさていたくあをみそこなはれ給かの人はわりなく思ひ
あまる時　くは夢のやうにみたてまつりけれと宮つきせすわりなき事におほし
たり院をいみしくをちきこえ給へる御心にありさまも人の程もひとしくたにや
はあるいたくよしめきなまめきたれはおほかたの人めにこそなへての人にはま
さりてめてらるれおさなくよりさるたくひなき御ありさまにならひたまへる御
心にはめさましくのみみ給ほとにかくなやみわたり給はあはれなる御すくせに
そありける御めのとたちみたてまつりとかめて院のわたらせ給こともいとたま
さかなるをつふやきうらみたてまつるかくなやみ給ときこしめしてそわたり給
女きみはあつくむつかしとて御くしすましてすこしさはやかにもてなし給へり
ふしなからうちやり給へりしかはとみにもかはかねとつゆはかりうちふくみま
よふすちもなくていときよらにゆら　くとしてあをみおとろへたまへるしもい
ろはさをにしろくうつくしけにすきたるやうにみゆる御はたつきなとよになく
らうたけ也もぬけたるむしのからなとのやうにまたいとたゝよはしけにおはす
としころすみ給はてすこしあれたりつる院の内たとしへなくせはけにさへみゆ
きのふけふかくものおほえたまふひまにて心ことにつくろはれたるやり水せん
さいのうちつけに心ちよけなるをみいたし給てもあはれにいまゝてへにけるを
おもほす池はいとすゝしけにてはちすの花のさきわたれるにはゝいとあをやか
にてつゆきら　くとたまのやうにみえわたるをかれみたまへをのれひとりもす
ゝしけなるかなとのたまふにおきあかりてみいたし給へるもいとめつらしけれ
はかくてみたてまつるこそ夢の心ちすれいみしくわか身さへかきりとおほゆる
おり　くのありしはやと涙をうけてのたまへは身つからもあはれにおほして

きえとまるほとやはふへきたまさかにはちすのつゆのかゝる許をとの給

契をかむこの世ならてもはちすはに玉ゐるつゆのこゝろへたつないてたま
ふかたさまはものうけれと内にも院にもきこしめさむ所ありなやみ給ときゝて
もほとへぬるをめにちかきに心をまとはしつる程みたてまつる事もおさ　くな
かりつるにかゝるくもまにさへやはたえこもらむとおほしたちてわたり給ひぬ
宮は御心のおにゝみえたてまつらむもはつかしうつゝましくおほすに物なとき
こえたまふ御いらへもきこえ給はねはひころのつもりをさすかにさりけなくて
つらしとおほしけると心くるしけれはとかくこしらへきこえ給をとなひたる人
めして御心ちのさまなとゝひ給れいのさまならぬ御心ちになむとわつらひ給御

ありさまをきこゆあやしくほとへてめつらしき御ことにもと許のたまひて御心の内にはとしころへぬる人〻たにもさることなきを不定なる御ことにもやとおほせはことにともかくものたまひあへしらひ給はてたゝうちなやみ給へるさまのいとらうたけなるをあはれとみたてまつり給からうしておほしたちてわたりたまひしかはふともえかへり給はて二三日おはするほといかに　くとうしろめたくおほさるれは御ふみをのみかきつくし給いつのまにつもるおほむことのはにかあらむいてやゝすからぬ世をもみるかなとわかきみの御あやまちをしらぬ人はいふ侍従そかゝるにつけてもむねうちさはきけるかの人もかくわたりたまへりときくにおほけなく心あやまりしていみしきことゝもをかきつゝけてをこせたまへりたいにあからさまにわたり給へる程に人まなりけれはしのひてみせたてまつるむつかしき物みするこそいと心うけれ心ちのいとゝあしきにとてふしたまへれはなをたゝこのはしかきのいとおしけに侍そやとてひろけたれは人のまいるにいとくるしくてみ木ちやうひきよせてさりぬいとゝむねつふるゝに院いり給へはえよくもかくし給はて御しとねのしたにさしはさみ給つようさりつかた二条院へわたり給はむとて御いとまきこえたまふこゝにはけしうはあらすみえ給をまたいとたゝよはしけなりしをみすてたるやうにおもはるゝもいまさらにいとおしくてなむひか　くしくきこえなす人ありともゆめ心をき給ないまみなおしたまひてむとかたらひ給れいはなまいはけなきたはふれことなともうちとけきこえたまふをいたくしめりてさやかにもみあはせたてまつり給はぬをたゝ世のうらめしき御けしきと心えたまふひるのおましにうちふし給て御物かたりなときこえ給ほとにくれにけりすこしおほとのこもりいりにけるにひくらしのはなやかになくにおとろき給てさらはみちたと　くしからぬ程にとて御そなとたてまつりなをす月まちてともいふなる物をといとわかやかなるさましてのたまふはにくからすかしそのまにもとやおほすと心くるしけにおほしてたちとまり給

　夕露に袖ぬらせとやひくらしのなくをきく　くおきて行らむかたなりなる

御心にまかせていひて給へるもらうたけれはつゐゝてあなくるしやとうちなけきたまふ

　まつ里もいかゝきくらんかた　くに心さはかすひくらしのこゑなとおほしやすらひてなをなさけなからむも心くるしけれはとまり給ひぬしつ心なくさすかになかめられ給いて御くた物はかりまいりなとしておほとのこもりぬまたあさすゝみのほとにわたり給はむとてとくおき給ふよへのかはほりをおとしてこ

れは風ぬるくこそありけれとて御あふきをき給てきのふうたゝねし給へりしおましのあたりをたちとまりてみ給に御しとねのすこしまよひたるつまよりあさみとりのうすやうなるふみのおしまきたるはしみゆるをなに心もなくひきいてゝ御覧するにおとこの手なりかみのかなといとえむにことさらめきたるかきさまなりふたかさねにこま　くとかきたるをみ給にまきるへき方なくその人の手なりけりとみ給つ御かゝみなとあけてまいらする人はみ給ふみにこそはと心もしらぬにこしゝうみつけてきのふのふみの色とみるにいといみしくむねつふ

　くとなる心ちす御かゆなとまいる方にめもみやらすいてさりともそれにはあらしいといみしくさることはありなんやかくいたまひてけむと思ひなす宮はなに心もなくまたおほとのこもれりあないはけなかゝる物をちらし給ひてわれならぬ人もみつけたらましかはとおほすも心おとりしてされはよいとむけに心にくき所なき御ありさまをうしろめたしとはみるかしとおほすいてたまひぬれは人ゝすこしあかれぬるにしゝうよりて昨日のものはいかゝせさせ給てしけさ院の御らむしつるふみの色こそにて侍つれときこゆれはあさましとおほして涙のたゝいてきにいてくれはいとおしき物からいふかひなの御さまやとみたてまつるいつくにかはをかせ給てし人ゝのまいりしにことありかほにちかくさふらはしとさはかりのいみをたに心のおにゝさり侍しをいらせ給しほとはすこしほとへ侍にしをかくさせ給つらむとなむ思給へしときこゆれはいさとよみしほとにいり給しかはふともえおきあからてさしはさみしをわすれにけりとのたまふにいとときこえむかたなしよりてみれはいつくのかはあらむあないみしかの君もいといたくおちはゝかりてけしきにてももりきかせ給事あらはとかしこまりきこえ給しものをほとたにへすかゝることのいてまうてくるよすへていはけなき御ありさまにて人にもみえさせ給けれはとしころさはかりわすれかたくうらみいひわたり給しかとかくまて思ひ給へし御ことかはたか御ためにもいとおしく侍へきことゝはゝかりもなくきこゆ心やすくわかくおはすれはなれきこえたるなめりいらへもし給はてたゝなきにのみそなき給いとなやましけにてつゆはかりのものもきこしめさねはかくなやましくせさせ給をみをきたてまつり給ていまはをこたりはて給にたる御あつかひに心をいれ給へることゝつらく思ひいふおとゝはこのふみのなをあやしくおほさるれは人みぬ方にてうち返しつゝみ給さふらふ人　くの中にかの中納言の手ににたるてしてかきたるかとまておほしよれとこと葉つかひきら　くとまかうへくもあらぬことゝもあり年をへて思ひわたりけることのたまさかにほいかなひて心やすからぬすちをかきつくしたるこ

とはいと見所ありてあはれなれといとかくさやかにはかくへしやあたら人のふみをこそおもひやりなくかきけれおちゝることもこそと思ひしかはむかしかやうにこまかなるへきおりふしにもことそきつゝこそかきまきらはしゝか人のふかきようゐはかたきわさなりけりとかの人の心をさへみおとし給つさてもこの人をはいかゝもてなしきこゆへきめつらしきさまの御心ちもかゝることのまきれにてなりけりいてあな心うやかく人つてならすうきことをしる　くありしなからみたてまつらむよとわか御心なからもえ思ひなをすましくおほゆるを猶さりのすさひとはしめより心をとゝめぬ人たに又ことさまの心わくらむと思ふは心月なく思ひへたてらるゝをましてこれはさまことにおほけなき人の心にもありけるかなみかとの御めをもあやまつたくひむかしもありけれとそれは又いふかたこと也宮つかへといひてわれも人もおなし君になれつかうまつるほとにをのつからさるへき方につけても心をかはしそめものゝまきれおほかりぬへきわさ也女御かういといへととあるすちかゝるかたにつけてかたほなる人もあり心はせかならすをもからぬうちましりておもはすなる事もあれとおほろけのさたかなるあやまちみえぬ程はさてもましらふやうもあらむにふとしもあらはならぬまきれありぬへしかくはかり又なきさまにもてなしきこえて内　くの心さしひく方よりもいつくしくかたしけなき物に思ひはくゝまむ人ををきてかゝることはさらにたくひあらしとつまはしきせられ給みかとゝきこゆれとたゝすなほにおほやけさまの心はへはかりにて宮つかへの程もゝのすさましきに心さしふかきわたくしのねきことになひきをのかしゝあはれをつくしみすくしかたきおりのいらへをもいひそめしねんに心かよひそむ覧なからひはおなしけしからぬすちなれとよるかたありやわか身なからもさはかりの人に心わけ給へくはおほえぬものをといと心月なけれと又けしきにいたすへきことにもあらすなとおほしみたるゝにつけて故院のうへもかく御心にはしろしめしてやしらすかほをつくらせ給ひけむ思へはその世のことこそはいとおそろしくあるましきあやまちなりけれとちかきためしをおほすにそ恋の山ちはえもとくましき御心ましりけるつれなしつくり給へとものおほしみたるゝさまのしるけれは女君きえのこりたるいとおしみにわたりたまひて人やりならす心くるしう思やりきこえ給にやとおほして心ちはよろしくなりにて侍をかの宮のなやましけにおはすらむにとくわたり給にしこそいとおしけれときこえ給へはさかしれいならすみえ給しかとことなる心ちにもおはせねはをのつから心のとかに思ひてなむ内よりはたひ　く御つかひありけりけふも御ふみありつとか院のいとやむことなくきこえつ

けたまへれはうへもかくおほしたるなるへしすこしをろかになともあらむはこ
なたかなたおほさむことのいとおしきそやととてうめき給へは内のきこしめさむ
よりもみつからうらめしと思ひきこえ給はむこそ心くるしからめわれはおほし
とかめすともよからぬさまにきこえなす人〻かならすあらむと思へはいとくる
しくなむなとのたまへはけにあなかちに思ふ人のためにはわつらはしきよすか
なけれとよろつにたとりふかきことゝやかくやとおほよそ人のおもはむ心さへ
思ひめくらさるゝをこれはたゝこくわうの御心やをき給はむとはかりをはゝか
らむはあさき心ちそしけるとほゝゑみてのたまひまきらはすわたり給はむこと
はもろともにかへりてを心のとかにあらむとのみきこえ給をこゝにははしはし心
やすくて侍らんまつわたり給て人の御心もなくさみなむ程にをときこえかはし
給ほとに日ころへぬひめ宮はかくわたりたまはぬ日ころのふるも人の御つらさ
にのみおほすをいまはわか御をこたりうちませてかくなりぬるとおほすに院も
きこしめしつけていかにおほしめさむと世中つゝましくなむかの人もいみしけ
にのみいひわたれともこしゝうもわつらはしく思ひなけきてかゝることなむあ
りしとつけてけれはいとあさましくいつのほとにさる事いてきけむかゝることも
はありふれはをのつからけしきにてももりいつるやうもやとおもひしたにいと
つゝましくそらにめつきたるやうにおほえしをましてさはかりたかふへくもあ
らさりしことゝもをみ給てけむはつかしくかたしけなくかたはらいたきにあさ
ゆふすゝみもなきころなれと身もしむる心ちしていはむかたなくおほゆとしこ
ろまめことにもあたことにもめしまつはしまいりなれつる物を人よりはこまか
におほしとゝめたる御けしきのあはれになつかしきをあさましくおほけなき物
に心をかれたてまつりてはいかてかはめをもみあはせたてまつらむさりとてか
きたえほのめきまいらさらむも人めあやしくかの御心にもおほしあはせむこと
のいみしさなとやすからす思ふに心ちもいとなやましくて内へもまいらすさし
てをもきつみにはあたるへきならねと身のいたつらになりぬる心ちすれはされ
はよとかつはわか心もいとつらくおほゆいてやしつやかに心にくきけはひみえ
給はぬわたりそやまつはかのみすのはさまもさるへきことかはかる　くしと大
将のおもひ給へるけしきみえきかしなといまそ思ひあはするしゐてこのことを
思ひさまさむとおもふ方にてあなかちになむつけたてまつらまほしきにやあら
むよきやうとてもあまりひたおもむきにおほとかにあてなる人は世のありさま
もしらすかつさふらふ人に心をき給こともなくてかくいとおしき御身のためも
人のためもいみしきことにもあるかなとかの御ことの心くるしさもえ思ひはな

たれ給はす宮はいとらうたけにてなやみわたり給さまのなをいと心くるしくく思ひはなちたまふにつけてはあやにくにうきにまきれぬこひしさのくるしくおほさるれはわたり給てみたてまつり給につけてもむねいたくいとおしくおほさる御いのりなとさま　くにせさせ給おほかたのことはありしにかはらすなか　くいたはしくやむことなくもてなしきこゆるさまをまし給けちかくうちかたらひきこえ給さまはいとこよなく御心へたゝりてかたはらいたけれは人めはかりをめやすくもてなしておほしのみみたるゝにこの御心の内しもそくるしかりけるさることみきともあらはしきこえ給はぬにみつからいとわりなくおほしたるさまも心をさなしいとかくおはするけそかしよきやうといひなからあまり心もとなくをくれたるたのもしけなきわさなりとおほすに世中なへてうしろめたく女御のあまりやはらかにをひれたまへるこそかやうに心かけきこえむ人はまして心みたれなむかし女はかうはるけ所なくなよひたるを人もあなつらはしきにやさるましきにふとめとまり心つよからぬあやまちはしいつるなりけりとおほす右のおとゝの北の方のとりたてたるうしろみもなくおさなくよりものはかなき世にさすらふるやうにておいゝて給けれとかと　くしくらうありて我もおほかたにはおやめきしかとにくき心のそはぬにしもあらさりしをなたらかにつれなくもてなしてすくしこのおとゝのさるむしんの女房に心あはせていりきたりけんにもけさやかにもてはなれたるさまを人にもみえしられことさらにゆるされたるありさまにしなしてわか心とつみあるにはなさすなりにしなといまおもへはいかにかとあることなりけり契ふかき中なりけれはなかくかくてたもたむことはとてもかくてもおなしことあらまし物から心もてありしことゝも世人もおもひいてはすこしかる　くしき思ひくはゝりなましいといたくもてなしてしわさなりとおほしいつ二条の内侍のかむのきみをは猶たえす思ひいてきこえ給へとかくうしろめたきすちのことうき物におほしゝりてかの御心よはさもすこしかるく思ひなされ給けりつゐに御ほいの事し給てけりときゝ給てはいとあはれにくちおしく御心うこきてまつとふらひきこえ給いまなむとたににほはし給はさりけるつらさをあさからすきこえたまふ

あまの世をよそにきかめやすまの浦にもしほたれしもたれならなくにさま　くなる世のさためなさを心におもひつめていまゝてをくれきこえぬるくちおしさをおほしすてつともさりかたき御ゐかうのうちにはまつこそはとあはれになむなとおほくきこえ給へりとくおほしたちにしことなれとこの御さまたけにかゝつらひて人にはしかあらはし給はぬことなれと心の内あはれにむかしより

つらき御契をさすかにあさくしもおほししられぬなと方　くにおほしいてらる
御返いまはかくしもかよふましき御ふみのとちめとおほせはあはれにて心とゝ
めてかき給すみつきなといとおかしつねなき世とは身ひとつのみしり侍にしを
ゝくれぬとのたまはせたるになむけに
　あま舟にいかゝは思ひをくれけんあかしのうらにいさりせしきみゑかうに
はあまねきかとにてもいかゝはとありこきあをにひのかみにてしきみにさした
まへはれいの事なれといたくすくしたるふてつかひなをふりかたくおかしけな
り二条院におはします程にて女君にもいまはむけにたえぬる事にてみせたてま
つり給いといたくこそはつかしめられたれけに心月なしやさま　く心ほそき世
中のありさまをよくみすくしつるやうなるよなへての世のことにてもはかなく
物をいひかはし時　くによせてあはれをもしりゆへをもすくさすよそなからの
むつひかはしつへき人は斎院とこの君とこそはのこりありつるをかくみなそむ
きはてて斎院はたいみしうつとめてまきれなくをこなひにしみ給にたなりなを
こゝらの人のありさまをきゝみる中にふかく思ふさまにさすかになつかしきこ
とのかの人の御なすらひにたにもあらさりけるかな女こをおほしたてむことよ
いとかたかるへきわさ也けりすくせなといふらむものはめにみえぬわさにてお
やの心にまかせかたしおいたゝむ程の心つかひはなをちからいるへかめりよく
こそあまた方　くに心をみたるましき契なりけれ年ふかくいらさりしほとはさ
う　くしのわさやさま　くにみましかはとなむなけかしきおり　くありしわか
宮を心しておほしたてたてまつり給へ女御は物の心をふかくしりたまふほとな
らてかくいとまなきましらひをし給へはなに事も心もとなき方にそものし給覧
みこたちなむなをあくかきり人にてむつかるましくて世をのとかにすくし給は
むにうしろめたかるましき心はせつけまほしきわさなりけるかきりありてとさ
まかうさまのうしろみまうくるたゝ人はをのつからそれにもたすけられぬるを
なときこえ給へははか　くしきさまの御うしろみならすとも世になからへんか
きりはみたてまつらぬやうあらしと思ふをいかならむとて猶物を心ほそけにて
かく心にまかせてをこなひをもとゝこほりなくしたまふ人ゝをうらやましく思
ひきこえたまへりかむの君にさまかはりたまへらむさうそくなとまたゝちなれ
ぬほとはとふらふへきをけさなとはいかにぬふ物そゝれせさせ給へひとくたり
は六条のひむかしの君にものしつけむうるはしき法ふくたちてはうたてみめも
けうとかるへしさすかにその心はへみせてをなときこえ給あをにひのひとくた
りをこゝにはせさせ給つくも所の人めしてしのひてあまの御くとものさるへき

はしめのたまはす御しとねうわむしろ屏風木長なとの事もいとしのひてわさとかましくいそかせ給けりかくて山のみかとの御賀ものひて秋とありしを八月は大将の御忌月にてかくそのことをこなひ給はむにひんなかるへし九月は院のおほきさきのかくれ給にし月なれは十月にとおほしまうくるをひめ宮いたくなやみ給へは又のひぬ衛門督の御あつかりの宮なむその月にはまいり給けるおほきおとゝゐたちていかめしくこまかにものゝきよらきしきをつくし給へりけりかむの君もそのついてにそ思ひおこしていてたまひけるななをなやましくれいならすやまひつきてのみすくし給宮もうちはへてものをつゝましくいとおしとのみおほしなけくけにやあらむ月おほくかさなり給まゝにいとくるしけにおはしませは院は心うしと思ひきこえ給かたこそあれいとらうたけにあえかなるさましてかくなやみわたり給をいかにおはせむとなけかしくてさま　くにおほしなけく御いのりなとことしはまきれおほくてすくし給御山にもきこしめしてらうたくこひしとおもひきこえ給月ころかくほか　くにてわたり給事もおさ　くなきやうに人のそうしけれはいかなるにかと御むねつふれて世中もいまさらにうらめしくおほしてたいの方のわつらひけるころはなをそのあつかひにときこしめしてたになまやすからさりしをそのゝちなをりかたくものし給らむはそのころほひひむなき事やいてきたりけむみつからしりたまふことならねとよからぬ御うしろみともの心にていかなる事かありけむうちわたりなとのみやひをかはすへきなからひなとにもけしからすうきことといひつるたくひもきこゆかしとさへおほしよるもこまやかなる事おほしすてゝし世なれとなをこのみちははなれかたくて宮に御ふみこまやかにてありけるをおとゝおはしますほとにてみ給そのことゝなくてしは　くもきこえぬほとにおほつかなくてのみとし月のすくるなむあはれなりけるなやみ給なるさまはくはしくきゝしのちねんすのついてにも思ひやらるゝはいかゝ世中さひしくおもはすなることありともしのひすくし給へうらめしけなるけしきなとおほろけにてみしりかほにほのめかすいとしなをくれたるわさになむなとをしへきこえ給へりいと　くおしく心くるしくかゝる内　くのあさましきをはきこしめすへきにはあらてわかをこたりにほいなくのみきゝおほすらんことをとはかりおほしつゝけてこの御返をはいかゝきこえ給心くるしき御せうせこにまろこそいとくるしけれおもはすに思ひきこゆることありともおろかに人のみとかむはかりはあらしとこそおもひ侍れたかきこえたるにかあらむとのたまふにはちらひてそむきたまへる御すかたもいとらうたけ也いたくおもやせてものおもひくしたまへるいとゝあてにおかしいとをさな

き御心はへをみをき給ていたくはうしろめたかりきこえたまふなりけりと思ひあはせたてまつれはいまよりのちもよろつになむかうまてもいかてきこえしとおもへとうへの御心にそむくときこしめす覧ことのやすからすいふせきをこゝにたにきこえしらせてやはとてなむいたりすくなくたゝ人のきこえなす方にのみよるへかめる御心にはたゝをろかにあさきとのみおほし又いまはこよなくさたすきにたるありさまもあなつらはしくめなれてのみゝなし給らむもかた　くにくちおしくもうれたくもおほゆるを院のおはしまさむほとはなを心をさめてかのおほしをきてたるやうありけむさたすき人をもおなしくなすらへきこえていたくなかるめたまひそいにしへよりほいふかきみちにもたとりうすかるへき女かたにたにみなおもひをくれつゝいとぬるき事おほかるを身つからの心にはなにはかりおほしまよふへきにはあらねといまはとすて給けむ世のうしろみにをき給へる御心はえのあはれにうれしかりしをひきつゝきあらそひきこゆるやうにておなしさまにみすてたてまつらむことのあえなくおほされんにつゝみてなむ心くるしとおもひし人ゝもいまはかけとゝめらるゝほたし許なるも侍らす女御もかくてゆくすゑはしりかたけれとみこたちかすそひ給めれは身つからの世たにのとけくはとみをきつへしそのほかはたれも　くあらむにしたかひてもろともに身をすてむもおしかるましきよはひともになりにたるをやう　くすゝしく思ひ侍院の御世のゝこりひさしくもおはせしいとあつしくいとゝなりまさり給てもの心ほそけにのみおほしたるにいまさらに思はすなる御なもりきこえて御心みたり給なこの世はいとやすしことにもあらすのちのよの御みちのさまたけならむもつみいとおそろしからむなとまほにそのことゝはあかし給はねとつく　くときこえつゝけ給に涙のみおちつゝ我にもあらすおもひしみておはすれは我もうちなきたまひて人のうへにてももとかしくきゝ思しふる人のさかしらよ身にかはることにこそいかにうたてのおきなやとむつかしくうるさき御心そふらんとはちたまひつゝ御すゝりひきよせ給て手つからおしすりかみとりまかなひかゝせたてまつり給へと御てもわなゝきてえかき給はすかのこまかなりし返事はいとかくしもつゝますかよはし給らむかしとおほしやるにいとにくけれはよろつのあはれもさめぬへけれとこと葉なとをしへてかゝせたてまつり給まいり給はむ事はこの月かくてすきぬ二の宮の御いきをひことにてまいり給ひけるをふるめかしき御身さまにてたちならひかほならむもはゝかりある心ちしけりしも月は身つからの忌月也としのをはりはたいとものさはかしまたいとゝこの御すかたもみくるしくまちみ給はんをと思ひ侍れとさりとてさのみのふへ

きことにやはむつかしく物おほしみたれすあきらかにもてなし給てこのいたくおもやせ給へるつくろひ給へなといとらうたしとさすかにみたてまつりたまふ衛門督をはなにさまの事にもゆへあるへきおりふしにはかならすことさらにまつはし給つゝのたまはせあはせしをたえてさる御せうそこもなし人あやしと思ふらんとおほせとみむにつけてもいとゝほれ　くしき方はつかしくみむには又わか心もたゝならすやとおほしかへされつゝやかて月ころまいり給はぬをもとかめなしおほかたの人はなをれいならすなやみわたりて院にはた御あそひなとなき年なれはとのみ思ひわたるを大将の君そあるやうあることなるへしすきものはさためてわかけしきとりしことにはしのはぬにやありけむと思ひよれといとかくさたかにのこりなきさまならむとはおもひより給はさりけり十二月になりにけり十よ日とさめてまひともならしとのゝうちゆすりてのゝしる二条の院のうへはまたわたりたまはさりけるをこのしかくによりそえしつめはてゝわたり給へる女御の君もさとにおはしますこのたひのみこは又おとこにてなむおはしましけるすき　くいとおかしけにておはするをあけくれもてあそひたてまつり給になむすくるよはひのしるしうれしくおほされける試楽に右大臣殿のきたのかたもわたり給へり大将の君うしとらのまちにてまつうち　くにてうかくのやうにあけくれあそひならし給けれはかの御方はおまへの物はみたまはす衛門督をかゝる事のおりもましらはせさらむはいとはえなくさう　くしかるへきうちに人あやしとかたふきぬへきことなれはまいり給へきよしありけるををもくわつらふよし申てまいらすさるはそこはかとくるしけなるやまひにもあらさなるを思ふ心のあるにやと心くるしくおほしてとりわきて御せうそこつかはすちゝおとゝもなとかかへさひまうされけるひか　くしきやうに院にもきこしめさむをおとろ　くしきやまひにもあらすたすけてまいり給へとそゝのかし給にかくかさねてのたまへれはくるしとおもふ　くまいりぬまたかむたちめなともつとひ給はぬほとなりけりれいのけちかきみすの内にいれ給てもやのみすおろしておはしますけにいといたくやせ　くにあをみてれいもほこりかにはなやきたるかたはおとうとの君たちにはもてけたれていとよういありかほにしつめたるさまそことなるをいとゝしつめてさふらひたまふさまなとかはみこたちの御かたはらにさしならへたらむにさらにとかあるましきをたゝことのさまのたれも　くいと思ひやりなきこそいとつみゆるしかたけれなと御めとまれとさりけなくいとなつかしくそのことゝなくてたいめんもいとひさしくなりにけり月ころは色　くのひやうさをみあつかひ心のいとまなきほとに院の御賀のためこゝ

にものし給みこのほうしつかうまつり給へくありしをつき　くとゝこほることしけくてかくとしもせめつれはえ思ひのことくしあへてかたのことくなんいもゐの御はちまいるへきを御賀なといへはこと　くしきやうなれと家においゝつるわらはへのかすおほくなりにけるを御らんせさせむとてまいなとならはしはしめしその事をたにはたさんとて拍子とゝのへむこと又たれにかはとおもひめくらしかねてなむ月ころとふらひものし給はぬうらみもすてゝけるとのたまふ御けしきのうらなきやうなるものからいと　くはつかしきにかほの色たかふらむとおほえて御いらへもとみにえきこえす月ころかた　くにおほしなやむ御ことうけたまはりなけき侍なから春の比をひよりれいもわつらひ侍るみたりかくひやうといふ物ところせくおこりわつらひ侍りてはか　くしくふみたつる事も侍らす月ころにそへてしつみ侍てなむ内なとにもまいらす世中あとたえたるやうにてこもり侍院の御よはひたりたまふ年なり人よりさたかにかそへたてまつりつかうまつるへきよしちしのおとゝ思ひをよひ申されしをかうふりをかけくるまをおしますゝてゝし身にてすゝみつかうまつらむにつく所なしけに下らうなりともおなしことふかきところ侍らむその心御覧せられよともよをしまうさるゝことの侍しかはをもきやまひをあひたすけてなんまいりて侍しいまはいよ　くいとかすかなるさまにおほしすましていかめしき御よそひをまちうけたてまつり給はむことねかはしくもおほすましくみたてまつり侍しをことゝもをはそかせ給てしつかなる御物かたりのふかき御ねかひかなはせ給はむなんまさりて侍へきと申給へはいかめしくきゝし御賀のことを女二の宮の御方さまにはいひなさぬもらうありとおほすたゝかくなんことそきたるさまに世人はあさくみるへきをさはいへと心えてものせらるゝにされはよとなむいとゝおもひなられ侍大将はおほやけかたはやう　くをとなふめれとかうやうになさけひたるかたはもとよりしまぬにやあらむかの院なにことも心をよひ給はぬことはおさ　くなきうちにもかくのかたのことは御心とゝめていとかしこくしりとゝのへ給へるをさこそおほしすてたるやうなれしつかにきこしめしすまさむ事いましもなむ心つかひせらるへきかの大将ともろともにみいれてまひのわらはへのよういい心はへよくゝはへ給へものゝしなといふ物はたゝわかたてたることこそあれいとくちおしき物なりなといとなつかしくのたまひつくるをうれしきものからくるしくつゝましくてことすくなにてこの御まへをとくたちなむとおもへはれいのやうにこまやかにもあらてやう　くすへりいてぬひむかしのおとゝにて大将のつくろひいたし給かく人まひ人のさうそくのことなとまた　くをこなひくは

へ給あるへきかきりいみしくつくし給へるにいとゝくはしき心しらひそふもけ
にこのみちはいとふかき人にそものし給めるけふはかゝるこゝろみのひなれと
御方　く物みたまはむにみところなくはあらせしとてかの御賀のひはあかきし
らつるはみにえひそめのしたかさねをきるへしけふはあをいろにすわうかさね
かく人三十人けふはしらかさねをきたるたつみのかたのつりとのにつゝきたる
らうをかく所にて山のみなみのそはより御前にいつるほと仙遊霞といふものあ
そひて雪のたゝいさゝかちるに春のとなりちかくむめのけしきみるかひありて
ほゝゑみたりひさしのみすのうちにおはしませは式部卿のみや右のおとゝはか
りさふらひたまひてそれよりしものかむたちめはすのこにわさとならぬひの事
にて御あるしなとけちかきほとにつかうまつりなしたり右の大とのゝ四らう君
大将殿の三らう君兵部卿のみやのそむわうの君たちふたりは万歳楽またいとち
ひさきほとにていとらうたけ也四人なからいつれとなくたかきいへのこにてか
たちおかしけにかしつきいてたる思ひなしもやむことなし又大将の御子のない
しのすけはらの二らう君式部卿の宮の兵衛督といひしいまは源中納言の御こわ
う上右のおほゐとのゝ三らう君れうわう大将殿のたらうらくそむさては太平楽
喜春楽なといふまひともをなんおなし御なからひの君たちおとなたちなとまひ
けるくれゆけはみすあけさせ給てものゝけうまさるにいとうつくしき御むまこ
の君たちのかたちすかたにてまひのさまも世にみえぬ手をつくしておほむ師と
もゝをの　くてのかきりをゝしへきこえけるにふかきかと　くしさをくはへて
めつらかにまひ給をいつれをもいとらうたしとおほすおい給へるかむたちめた
ちはみな涙おとし給式部卿の宮も御まこをおほして御はなの色つくまてしほた
れ給あるしの院すくるよはひにそへてはゑひなきこそとゝめかたきわさなりけ
れ衛門督心とゝめてほゝゑまるゝいと心はつかしやさりともいましはしならん
さかさまにゆかぬとし月よおいはえのかれぬわさ也とてうちみやり給に人より
けにまめたちくんしてまことに心ちもいとなやましけれはいみしきこともめも
とまらぬ心ちする人をしもさしわきてそらゑひをしつゝかくのたまふたはふれ
のやうなれといとゝむねつふれてさかつきのめくりくるもかしらいたくおほゆ
れははけしき許にてまきらはすを御覧しとかめてもたせなからたひ　くしゐ給へ
ははしたなくてもてわつらふさまなへての人にゝすおかし心地かきみたりてた
へかたけれはまたこともはてぬにまかて給ぬるまゝにいといたくまとひてれい
のいとおとろ　くしきゑひにもあらぬをいかなれはかゝるならむつゝましと物
を思ひつるに気ののほりぬるにやいとさいふはかりおくすへき心よはさとはお

ほえぬをいふかひなくもありけるかなと身つから思ひしらるしはしのゑひのまとひにもあらさりけりやかていといたくわつらひ給おとゝはゝ北の方おほしさはきてよそ　くにていとおほつかなしとてとのにわたしたてまつり給を女宮のおほしたるさまたいと心くるしことなくてすくすへきひ比は心のとかにあいなたのみしていとしもあらぬ御こゝろさしなれといまはとわかれたてまつるへきかとてにやとおもふはあはれにかなしくをくれておほしなけかんことのかたしけなきをいみしと思ふはゝみやす所もいといみしくなけき給て世のことゝしておやをは猶さる物にをきたてまつりてかゝる御なからひはとあるおりもかゝるおりもはなれたまはぬこそれいのことなれかくひきわかれてたひらかにものしたまふまてもすくし給はむか心つくしなるへきことをしはしこゝにてかくてこゝろみたまへと御かたはらに御きちやうはかりをへたてゝみたてまつり給ことはりやかすならぬ身にてをよひかたき御なからひになましひにゆるされたてまつりてさふらふしるしにはなかく世に侍りてかひなき身のほともすこしひとゝひとしくなるけちめをもや御覧せらるゝとこそおもふ給つれいといみしくかくさへなり侍へれはふかき心さしをたに御覧しはてられすやなり侍りなむとおもふたまふるになんとまりかたき心地にもえゆきやるましく思給へらるゝなとかたみになき給ひてとみにもえわたり給はねは又はゝきたのかたうしろめたくおほしてなとかまつみえむとはおもひたまふましきわれは心ちもすこしれいならす心ほそき時はあまたの中にまつとりわきてゆかしくもたのもしくもこそおほえ給へかくいとおほつかなきことゝうらみきこえ給も又いとことはりなり人よりさきなりけるけちめにやとりわきておもひならひたるをいまになをかなしくし給ひてしはしもみえぬをはくるしき物にし給へは心ちのかくかきりにおほゆるおりしもみえたてまつらさらむつみふかくいふせかるへしいまはとたのみなくきかせ給はゝいとしのひてわたり給ひて御覧せよかならす又たいめんたまはらむあやしくたゆくをろかなる本上にてことにふれてをろかにおほさるゝこともありつらむこそくやしく侍れかゝるいのちのほとをしらてゆくすゑなかくのみおもひ侍けることゝなく　くわたりたまひぬ宮はとまり給ていふかたなくおほしこかれたり大殿にまちうけきこえ給てよろつにさはき給さるはたちまちにおとろおとろしき御心ちのさまにもあらす月ころものなとをさらにまいらさりけるにいとゝはかなきかうしなとをたにふれたまはすたゝやう　くものにひきいるゝやうにみえ給さる時のいうそくのかく物したまへは世中おしみあたらしかりて御とふらひにまいり給はぬ人なし内よりも院よりも御とふらひしは

くきこえつゝいみしくおしみおほしめしたるにもいとゝしきおやたちの御心のみまとふ六条院にもいとくちおしきわさなりとおほしおとろきて御とふらひにたひ　くねんころにちゝおとゝにもきこえ給大将はましていとよき御中なれはけちかくものし給つゝいみしくなけきありき給御賀は廿五日になりにけりかゝる時のやむことなきかむたちめのおもくわつらひたまふにおやはらからあまたの人〻さるたかき御なからひのなけきしほれ給へるころをひにてものすさましきやうなれとつき　くにとゝこほりつる事たにあるをさてやむましき事なれはいかてかはおほしとゝまらむ女宮の御心の内をそいとおしく思ひきこえさせ給れいの五十寺の御す経又かのおはします御てらにもまかひるさなの